

もやしの唄 (二〇一二年改訂版)

とき 一九六〇年代中頃

ところ 郊外にある小さなもやし屋「泉商店」

登場人物 泉 恵五郎

いずみ けいごろう
いずみ とうこ
泉 十子

いずみ かずひこ
泉 一彦

ささき とみ (いずみ しずこ ひぐち やえ)
佐々木 とみ (泉 静子 / 樋口 八重)

たかの くりこ
高野 九里子

むらまつ ゆきお
村松 幸雄

きすけ
喜助

*使用曲 『鉄道唱歌』第一集

舞台は古い小さな日本家屋の泉家。

母屋の茶の間には、ちゃぶ台などのささやかな家財道具と仏壇がある。

ギターが一本立てかけられている壁には、「水 一ねん三くみ
いずみ かんた」というお習字に、朱で花丸のつけられた半紙が貼られている。

茶の間の正面から廊下を降りた中庭の上手側に、「泉商店」の古びた看板が掛けられた小屋がある。中はもやしの製造場である「室^{むろ}」と呼ばれる場所。

その手前にはポンプの取り付けられた井戸があり、汲み上げられた水は、もやしの小屋に運ばれる仕組み。

辺りには四斗樽^{しとだる}や桶が積み重なっている。

井戸の脇の洗い場で、村松と九里子がタワシで桶を洗っている。

テキパキと次々に桶を洗い上げていく九里子に対し、慣れない手つきでもたもたと作業する村松。

九里子 もっと力をいれないと、ぬめりがとれませんか？

村松 はい。

九里子 こうです、こう！（とタワシで力強く桶をこすってみせる）

村松 はい……！（と力いっぱいこすってみる）

九里子 （仕事に集中しながら）お仕事にはもう慣れました？

村松 （早くも力尽きてしまい）……もやし作りにこれほど手間が掛かると

は知りませんでした……。

九里子 あたしも初めはびっくりしましたよ。温度からなにからあんなに気

を遣うなんて。

村松 もやしの室は摂氏 30℃、湿度は 80% に保たなければいけないそうです……。

九里子 適当に水をやっておけば勝手に育つのかと思ってました。

村松 水遣りは六時間おきです……。

九里子 すぐ傷いたむんですって。ちよつとそれを怠ったりすると。

村松 一回の水遣りみずやに二時間はかかります。いちいちボイラーで沸かしたお湯と井戸水をあわせて、もやし好みの温度の水を作るんです。それを朝の六時と昼の十二時、夕方の六時と夜中の十二時に……。一体、いつ寝ればいいんですか？

九里子 おまけに明け方の三時には出荷の準備を始めるんですよ。

村松 室の中は暗いし、変な音はするし……。

九里子 ゴキブリじゃありませんか？ もやしに毒だから殺虫剤が使えなくて、毎日戦いだって聞きました。

村松 水を遣って水を遣って、洗って量って袋に詰めて……。

九里子 恵五郎さんは偉いですよ。幹太君を育てながら、立派に大変な家業を継がれて。

村松 (突然、がっくりと崩れ落ち) 僕には無理です！

九里子 ……どうしたんです？

村松 恵五郎さんのようにはとてもできません！

九里子 だって村松さん、まだここに来て一週間じゃありませんか。

村松 何年いたってあれほど熱心にもやしの面倒なんてみられません。第一、あんなに蒸し暑い所であんなに長靴を履いていたら、足が臭くなってしまう！

九里子 きつとそのうち慣れますよ。

村松 足の臭いにですか？！

九里子 足なんて洗えばいいじゃないですか。村松さん、慣れないお仕事で疲れてるんですよ。しばらく夜中の水遣りは勘弁してもらったら……。

村松 ……夜中の水遣りはやっています……。

九里子 え……？

村松 夕食の後は、朝の出荷の準備まで寝ていいって……。僕が毎日、あまりにも疲れ果ててしまうもので、恵五郎さん、気を遣ってくださいって……。

九里子 そうなんですか……。

村松 ご自分だってあんなに疲れているのに……。

九里子 あたしも心配なんですよ。恵五郎さん、しょっちゅう居眠りなさつてるでしょう？ 配達途中で事故でも起こしやしないだろうかって……。

村松 申し訳ありません……。僕が不甲斐ないばかりに。

九里子 別に村松さんのせいじゃ……。

村松 ……僕のことを、なんてダメな男だと思っっているでしょう？

九里子 思ってませんよ。そりゃあ最初は、ラーメンを一本ずつ食べるなんて、変わったお客さんだなあとは思いましたけど……。

村松 ……時間を稼いでいたんです……。行くところがなかったもので……。

九里子 よかったですね。ちょうど泉さんのお宅で住込みの人を探してらして。

村松 よくもこんな役立たずを紹介しやがってと、責められたりしていませんか？

九里子 とんでもない！ よくぞあんな働き者を連れてきてくれたって、感謝されているくらいです！

村松 ……誰が？

九里子 え……？

村松 誰が言ったんですか？ 僕のことを働き者だって。

九里子 ……誰も言っていないんですけど……多分みなさん、心の中では……。

村松 気休めはよしてください！ 僕なんてただの穀つぶしなんだ！

九里子 そんなこと……。

村松 だつてうつかりすると幹太君よりたくさん寝ているんですよ!?

九里子 ……。

村松 ……でもまだ眠いんです! (突っ伏してしまふ)

九里子 ……村松さん。あとはあたしがやっておきますから、少しお部屋で横になられたらどうですか?

村松 (起き上がり) そうはいきません。高野さんだつてお店に戻らなければいけないのに。

九里子 あ、名前で呼んでください。みなさん、そうしてくださいるので。

村松 ……中華料理屋さんのお仕事だつて大変でしょう? どうしてまたこのお手伝いまで?

九里子 それはだつて、ほら、うちのお店は結構暇だし、いつも配達に来てくれる恵五郎さんがとてもお疲れのご様子だし、奥様を早くに亡くされて、まだ小さいお子さんにも手がかかるとて伺ったし、あたしでなにかお役に立てることがあればなあつて…。

村松 ……九里子さんは立派です。

九里子 そんな…。

村松 それに比べて僕は…。

茶の間で電話が鳴る。

九里子 (少しホツとして) あ! 電話ですよ。どなたもいらつしやらないのかしら?

九里子が茶の間に向かいかけると、奥から十子が出てきて電話に出る。

十子 (終始朗らかに) はい、泉商店です。あら、大作だいさくさん? お父さんの

具合どう? ……そう、よかったわねえ。お兄ちゃんはね、いま銀行。大

変よ、最近は大い工場にお客さんとられちゃつて。どうしてあんなに安

く出来るのかしら。もやしなんてただでさえ安くて手間ばっかりかかるんだから、値段の下げようがないと思うんだけど。……ええ、こっちはみんな相変わらず。そうそう、大作さんの代わりの人、見つかったのよ。村松さんて若い人。なにかねえ、お父さんの会社を飛び出して来ちゃったんですって。跡を継ぐのがイヤみたい。贅沢な悩みよねえ？ ……そうなの、お坊ちゃんなのよ。働いたことなんて全然なさそうな綺麗な手をしているの。色白でひよろひよろしていて、まさに「もやしっ子！」って感じよ！
今度、写真撮って送るわね。

九里子、十子と村松の双方を気にしながらオロオロする。

みるみるうなだれていく村松。

そこへカメラを首からぶら下げた一彦が帰ってくる。

一彦 ただいまあ。

十子 あ、一彦が帰ってきた。

一彦 誰？

十子 それじゃあね。まだまだ暑くて大変だけど。ああ、そちらは涼しいわよね。

一彦 ね、誰？ 大作さん？

十子 え？ 夏は暑いのか？ 盆地だから？ ふうん……。

一彦 代わって代わって！

十子 なんにしても体に気をつけてね。ご両親によろしく。それじゃあ。(切る)

一彦 なんだよ、代わってって言ったのに。

十子 だって山形からじゃ電話代がかかって悪いじゃない。

一彦 どうせ姉ちゃんが一方的に喋ってたんじゃないの？

十子 お父さんの病氣、よくなつたって。

一彦 大作さんもついに農家の跡取かあ。一生食うには困らないだろうけど

なあ。

十子 そう言えばあなた、就職活動やってるの？

一彦 (ふと庭に目をやり) 九里ちゃん、写真撮ってあげるよ。

九里子 (必死に) 村松さん、ほら！ 写真ですって！

村松 イヤですよ。山形に送られてしまう……。

九里子 (一彦に) 村松さんも一緒にいいですよね？

一彦 じゃあ並んで並んで。(カメラを構えて) はい、撮りますよー。村松さん、もつといい顔色してー。はい、チーズ！ (撮る)

九里子 ありがとうございます。

村松 これで山形でもやしっ子呼ばわりだ……。

九里子 村松さん……。

一彦 姉ちゃんも撮ってやろうか？

十子 そんなことより、六年も大学に行ったんだから、うんとい会社に入ってもらわなきゃ困るわよ？

一彦 二年も留年してたら、いい会社は雇ってくれないよ。

十子 あら、そーお？ ねえ、村松さん。いい会社ってそういうものなの？

村松 会社によるんじゃないでしょうか。

十子 そうよねえ！ 人より長く勉強した分、優秀だって思ってくれるいい会社だってあるわよねえ。

裏口から恵五郎が帰ってくる。

恵五郎 ただいま。

九里子 おかえりなさい。

十子 遅かったじゃない。

一彦 また車の中で寝てたんだろ。

恵五郎 うん。(洗い場にしゃがんで九里子から桶を受取ろうとしながら) いつもありがとう、九里子さん。あとは俺がやるからいいよ。松村さんもご

くろうさま。

村松 ……「村松」です。

恵五郎 ああ、そうか……。 (寝てしまう)

九里子 あの……。恵五郎さん？

恵五郎 (目を覚まし) ああ、いつもありがとう、九里子さん。あとは俺がやるからいいよ。松村さんもごくろうさま。

村松 ……「村松」です……。

恵五郎 ああ、そうか……。 (寝てしまう)

一彦 ほっときや一生やってるな。

十子 お兄ちゃん！ 起きてー！

恵五郎 (目を覚まし) ああ、ありがとう。松村さんもごくろうさま。

村松 ……「村松」です……。

恵五郎 ああ、そうか……。あとは俺が……。

九里子 (腕ずくで恵五郎を引っ張り起こしながら) 無理ですから！ 少し

お休みになってください！ (と、廊下に座らせる)

恵五郎 悪いね。じゃあ、ちよつとだけ……。

十子 (恵五郎に) さつき大作さんから電話あったわよ。お父さん、退院したって。ねえ、お兄ちゃん知ってた？ 山形って盆地だから夏は暑いんだって。冬は屋根まで雪が積もるっていうのに大変よね。

恵五郎 ……。 (寝ている)

十子 お兄ちゃん！

恵五郎 (起きて) お米のお礼、言ってくれた？

十子 (元気に) 忘れた！

一彦 (映画雑誌を見ていて) あ！ ゼロゼロセブン 007の新しいヤツやってる！ 姉ち

ゃん、一緒に観に行こうぜ！

十子 ダメよ。夕方から博さんと結婚式の打合せだもの。

電話が鳴る。

惠五郎 (出て) はい、泉商店です。毎度どうも。はい。

一彦 どうせただのデートだろ？ 吉田さんと三人で観に行こうよ。

十子 やあよ。結婚前の貴重な二人の時間を邪魔しないでちょうだい。

惠五郎 (空いている方の耳を指で塞ぎながら) はい。明日がお休みで、明

後日四キロですね。はい、承知しました。(電話を切ってメモをとる)

一彦 結婚前の弟との時間の方が貴重だろ？ 世の中に男はごまんといるけ

ど、弟は世界で俺一人なんだぞ？

十子 馬鹿ねえ、あたしと結婚してくれるのは世界で博さんただ一人なの

よ？

一彦 うーん、それは説得力があるなあ……。

惠五郎 十子、お茶淹れて。(と座った途端、自動的にまぶたが下りてくる)

一彦 九里ちゃん、映画観に行かない？

九里子 これからお店があるので。

一彦 村松さんは？

村松 僕も仕込みが……。

一彦 じゃあ幹太だ。(惠五郎に) ねえ、幹太は？

惠五郎 (寝ている)

一彦 兄ちゃん！ 幹太は？

惠五郎 ……学校だよ。

一彦 ちえつ。あいつ、小学生のくせに真面目だなあ。

惠五郎 一彦、最近、大学行ってるか？

どこからか ♪汽笛一声新橋を♪と『鉄道唱歌』を歌う声が聞こえてくる。

一彦 あ！ 喜助さんだ。

喜助 (朗々と歌いながら庭先に現れ) あーたごのやーまに入ーりのこるー

つーきをたーびじの とーもとしてー。

一彦 (庭に下りて) 喜助さん、映画観に行こう！

喜助 田中絹代？

一彦 ジェームズ・ボンド。(ピストルを撃つ真似)

喜助 じゃあ行かない。

一彦 (ため息) しょうがない、一人で行ってくるか。(とそのまま出掛けて行く)

恵五郎 あいつ、友達いないのか……？

喜助 恵ちゃん、こんにちは。

恵五郎 いらっしやい。

喜助 トコちゃん、こんにちは。

十子 喜助さんもお茶飲む？ (廊下にお茶を二つ置き) 九里ちゃんたちも休んで。お茶入ったから。

九里子 ありがとうございます。

喜助 九里子さん、こんにちは。

九里子 こんにちは、喜助さん。

喜助 (村松の顔をじつと見て) 知らない人、こんにちは。

村松 (かなり面食らいながら) ……こんにちは。

十子 あら、喜助さん、初めて？

恵五郎 (喜助に) こちらね、大作さんの代わりに今度新しく来てくれた松…あれ？ 村松？ 松村？

喜助 村松村さん、こんにちは。

十子 あーあ、間違えて覚えちゃった。

恵五郎 (村松に) ずっと昔、うちを手伝ってくれてた喜助さん。今も時々遊びに来てくれるんだよ。

喜助 (あらためてもう一度村松に) こんにちは。

村松 (応対に困って) ……歌が、お上手ですね。

喜助 (頷いて) 『鉄道唱歌』。六十六番まで歌えるよ。(歌う) 汽笛一声新橋

をく

電話が鳴る。

恵五郎 まあ上がってよ（電話に出て）はい、泉商店です。

九里子 （歌い続ける喜助に人差し指を立てて）喜助さん、しーっ、しーっ！

喜助 （辺りを見まわし）幹ちゃんは？

十子 まだ学校よ。

喜助 （とても残念そうに）そうかあ……。

恵五郎 はい、四キロを二つですね。いつもありがとうございます。

喜助 じゃあ、帰ります。

十子 なんだ、幹太に会いに来たの？

九里子 （電話をする恵五郎を見つめていたが）あたしもそろそろ。（喜助に）

そこまでいっしょに帰りましょうか。

喜助 はい。

恵五郎 （電話を切り）喜助さん、もう帰るの？ ちよっと待って。もやし

持っていきなよ。（と、小屋の中へ入っていく）

喜助 はい！ ……。 （村松を再びじっと見て）

村松 ……なんですか？

喜助 もやしみたい！

九里子 （ぎよっとして）喜助さん！

十子 そうでしょう？ うちのお店にぴったりよね！

九里子 （慌てて村松に）褒めてるんです！ 褒めているんですよ！ 村松

さん、色白でつやつやしてるから！

村松 ごちそうさまでした……。 （と小屋へ向かう）

恵五郎 （もやしの入った袋を手に小屋から出てきて）なんだ松村さん、

顔色よくないね。

村松 生まれつきです。母が秋田の出身なんです。「村松」です。

恵五郎 ああ、本当に失敬。

村松 ……豆を洗ってきます……。 (と小屋の中へ)

恵五郎 (見送って) ムラマツ、ムラマツ……。 どうして覚えられないのかなあ。

十子 お兄ちゃん、本当にダメよね。 九里ちゃんのこと半年くらい「クニコさん」って呼んでたでしょう？

恵五郎 その節は大変失礼しました

九里子 いいんです、クニコでも九里子でも、好きな方で呼んでいただければ。

恵五郎 (喜助に) はい、お土産。

喜助 (受取り) 油でサツと。

恵五郎 そうそう。油でサツと炒めて食べてね。

喜助 ありがとう。さようなら。

恵五郎 また来てよ？

喜助 トコちゃんもさよなら。

十子 うん、またね。

九里子 失礼します。

恵五郎 気をつけて。

帰って行く喜助と九里子を手を振って見送る恵五郎。

十子 どんどん子どもにかえっていくわね。

恵五郎 うん……。

十子 ……さて！ あたし、今夜出掛けちゃうけど、晩ごはんどうしよう？

恵五郎 吉田さん？

十子 えへへ。

恵五郎 どうしようって、はなから作る気ないんだろう。

十子 えへへ。

恵五郎 今日はいいいよ。お義母かあさんが来て晩飯作ってくれるって言ってたから。

十子 佐々木のおかあさん！ ありがとう！

とみ （玄関から声だけ）お邪魔しますね。

十子 噂をすれば！

とみ （買物かごを手に入ってきて）今、誰かお礼言った？

恵五郎 いらつしやい。

十子 （買物かごを受取り）ああ残念！ 佐々木のおかあさんのごはん食べられなくて。

とみ 全然残念そうじゃないわねえ。吉田さんとお出掛け？

十子 お土産買ってくるわね！（と奥の部屋へ）

とみ 十子ちゃん、幸せそうね。

恵五郎 吉田さんに会う前からいつも幸せそうでしたけど、最近は何を越してますね。

とみ いいじゃないの、一番楽しい時期だよ。（仏壇に手を合わせる）

恵五郎 お寺さんには電話しておきました。あとは人数なんですけど……。

とみ うちの親戚はいいにしようかと思うの。みんな遠いし、年寄りばかりだし。

恵五郎 吉田さんはどうしようかな。

とみ お呼びしなくてもいいんじゃない？ 静子を直接ご存じなわけじゃないでしょう。

恵五郎 ……じゃあ、うちも家族だけってことで……。

とみ （仏壇を眺め）……もう六年も経つのねえ……。

恵五郎 幹太が……小学生になりましたからね。（ギターを手に取り、爪弾き始める）

とみ 自分の娘の、七回忌しちに出ようなんて、夢にも思わなかったわ。

間。

恵五郎は静かにギターを弾いている。

とみ ……恵五郎さんには、本当に感謝しているんです。短い間だったけど、幹ちゃんみたいなかわいい男の子にも恵まれて、静子は幸せでした。

恵五郎 ……。

とみ だから……もういいんですよ。

恵五郎 ……。

とみ もし、いい方がいらしたら、どうぞいつしよになってくださいね。

恵五郎 ……。

とみ ……再婚……考えていないの？

恵五郎 ……。

とみ 恵五郎さん？

恵五郎 ……。

とみ ……。(ため息) また寝ているのね……。

暗転。

二

誰もいない茶の間で電話が鳴る。奥から一彦が現れる。

一彦 (電話に出て) はい、泉です。ああどうも。はあ……。ああ、残高がねえ。……いや、引き落としが出来ないって言われても……。いま兄貴いらないですよ。ええ。俺じゃわかんないから、帰ったら電話させます。はい。……はいはい、必ず、帰ったらすぐにね。はい。

電話を切って、ふとちゃぶ台の上に目をやると、原稿用紙が一枚乗っ

ている。

一彦 お！ 宿題か？（と原稿用紙を手に取り、読み上げる）「ぼくのお父さん。ぼくのお父さんは、もやしやです。おいしいもやしをつくるために、まい日、いっしょうけんめいはたらいしています。お父さんのおしりにはスイッチがあつて」……？「お父さんがすわると、そのスイッチがおされるので、お父さんはねむってしまいます。しごとがいっぱいあつて、スイッチもあつて、いつもいそがしいお父さんがときどきあそんでくれると、ぼくはともうれしくなります。ぼくは、お父さんが大すきなので、大きくなったら、お父さんのようになりたいです。」……なるほどねえ……。

とみ （玄関から声）こんにちは。

とみが風呂敷包みを手に入ってくる。

とみ 十子ちゃんは？

一彦 どうせ買物だよ。電気洗濯機だ冷蔵庫だつて、毎日うるさいうるさい。

とみ 頼まれていた浴衣の縫い直しが出来たのよ。

一彦 そんなことまでおばちゃんに頼んでんの？ あれでよく嫁にいけるよなあ。知ってる？ 姉ちゃん、吉田さんのお母さんに「得意料理はもやし炒めです」って言いきったんだよ？

とみ （仏壇に手を合わせてから）さぞ堂々と言ったんでしょうね。目に浮かぶようだよ。

一彦 この間、吉田さんが昼飯食いに来た時だつて、もやし炒めしか出さな
いもんだからさ、兄ちゃんが見るに見兼ねて味噌汁と卵焼き作ったんだ
ぜ？ もう心配だよ。

とみ これからはどんどん便利な道具が使えるんだもの。大丈夫よ。

一彦 俺が心配してるのは吉田さんの方ね。

とみ ああ。

一彦 仕事に疲れて帰って来ても、姉ちゃんにもやししか炒めてもらえないんじゃないかって、俺は胸を痛めてるわけ。

とみ うまいこと言うわね。

一彦 おばちゃん、将棋やろうよ。(将棋盤を引っ張り出す)

とみ 私、よく知らないのよ。

一彦 (駒を並べながら) 駒の進め方くらい知ってるでしょ？

とみ 本当にその程度よ？

一彦 充分充分！

一彦ととみ、将棋を指し始める。

とみ ……一彦君。

一彦 んー？

とみ お仕事、決まったの？

一彦 んー……。

とみ お友達みんな決まってる時期じゃない？

一彦 そうねえ……。

とみ ……そう言えば、一彦君は写真家になりたかったんだっけ。

一彦 ……俺、やっぱり映画監督になろうかなあ。兄ちゃん主役にしてさ、

「眠り恵五郎・水撒き殺法」なんてどう？

とみ …………。

一彦 …………。

とみ ……恵五郎さん、再婚する気ないのかしら……。

一彦 どうかねえ……。

とみ 誰かよさそうな方がいるって話、聞かない？

一彦 聞かないなあ……。

間。

とみ …… 幹ちゃん、お母さん欲しがったりしていない？

一彦 してないと思うよ。

とみ …… 寂しくないのかしらねえ……。

一彦 うちは賑やかだからなあ。ま、賑やかなのは姉ちゃんだけけど。

とみ 十子ちゃんはお嫁に行っちゃうじゃない。

一彦 すぐ出戻って来たりして。

とみ これ、縁起でもない。

十子 (玄関から声) ただいま！

一彦 ほら、出戻ってきた。

とみ およしなさいって。

十子が勢いよく茶の間に入ってくる。

十子 あら、佐々木のおかあさん、いらっしやい！

とみ 浴衣、出来たわよ。

十子 わあ！ ありがとう！（将棋盤を覗き込み）あら、おかあさん、ほら、その角！ 次で王手飛車取りじゃない。

とみ そうなのよねえ……。

十子 (勝手に両者の駒を進め) はい、一彦の負け！

一彦 ああ！ なんだよ！

十子 (とみに) そうだ、ちょうどよかった。今、ワンピース作ってるんだけど、襟の始末がうまくいかないのよ。ちよつと見てくれる？

とみ それは構わないけど…… (一彦に) なんだかごめんさいね。

一彦 (片付けながら) いいの、慣れっこなの。

十子 (早速ワンピースを持ち出してきて) ほら、ここなんだけどね……。
一彦 俺、腹減ったよ。お土産ないの？

十子 胡瓜がまだ残ってるんじゃない？

一彦 えー、胡瓜ー？

一彦、不満そうに台所へ。

とみ (ワンピースの襟元を見ながら) これは一遍ほどくようだわねえ。フ
アスナーのしっぽは見返しにはさまないと。

十子 そっか。ふんっ！(と力尽くでほどこうとする)

とみ (慌てて) 缺あるでしょう？ 持ってらっしゃい。

十子 はーい。

軽トラックの止まる音。

やがて、歌声とともに、喜助が豆の入った麻袋を持って、裏口から現
れる。

喜助 はーるかに 見ーえし 富士の嶺^ねはー はーや我がそばにー 来ーた
りたりー ゆーきの かーんむり 雲の帯ー いーつも けーだかきすー
がたにてー。

とみ まあまあ、お手伝いですか？

喜助 とみさん、こんにちは。

恵五郎 (同じく麻袋を抱えて現れ) 無理しないでよ、喜助さん。(十子たち
に) 途中でばったり会ってね、手伝うって言って聞かないんだ。一彦は？
十子 佐々木のおかあさんに将棋で負けて、へそ曲げてる。
とみ 悪いことしちゃったわねえ。

恵五郎 いいんですよ。あいつ、弱いんだ。「どうしたら勝たせてあげられる
かわからない」って、最近、幹太が悩んでる。

一彦 (台所から顔を出し) どうもろこしがあるじゃん！(恵五郎に気づき)
あ、銀行から電話あったよ。

恵五郎 うん、わかってる。いいんだ、今、寄って来た。

一彦 あ、そ。(十子に) ねえ、あれ、茹でていいだろ？

十子 どうもろこしなんてあつたっけ？

喜助 一ちゃん、こんにちは！

一彦 喜助さんも食べるよね？

喜助 はい。

恵五郎 それよりこっち頼むよ。

一彦 茹で終わったらねー。(と再び台所へ)

恵五郎 (ため息。喜助がさっさと小屋に向かっているのに気づき) ああ！

ゆっくりね！ 足元、気をつけて！(と後を追う)

とみ ……喜助さん、お元気そうね。

十子 体の方はね。

とみ ……。今日はなんのお買物だったの？

十子 電気洗濯機を見に行ったの。出始めの頃より、ずいぶん安くなつてたわ。

とみ そういう時代になったのねえ。

十子 もう少し待った方がいいのかしら。

とみ 手で洗っても破けてしまう服なんて、もうどこにもないんでしようね

え……。

十子 カラーテレビはまだ手が出ないわ。

一彦 (茶の間に戻ってきて) カラーテレビまで買う気でいたの!? 姉ちゃん、玉の輿ってわけじゃないんだからさあ。

もやし小屋の方でバタバタと騒がしい音。

やがて恵五郎に支えられて村松が、その横でオロオロしながら喜助が小屋から出てくる。

喜助 もやしさん！ もやしさん、しっかりして！

村松 (力なく)「村松」ですから……。

喜助 どうしよう。どうしよう……！

恵五郎 大丈夫だよ、喜助さん。軽い一酸化炭素中毒だから。

十子 あらやだ、大変。

恵五郎 涼しくなってきたから練炭入れといたんだよ。注意するの忘れてた。

(と、村松を廊下で休ませる)

村松 ちよつとくらぐらしただけです……。

喜助 深呼吸、深呼吸よ、もやしさん！

一彦 また兄ちゃんが酸欠でふらふら酔っ払いみたいになる季節かあ。もう

秋だねえ。

十子 (一彦に) そうよ、もう秋なのよ？ 一彦、就職は？

一彦 (新聞を広げ) しまった、やぶ蛇だ……。

とみ ちゃんとお医者様にお連れしたら？ ほら、いつだったか隣町のもや

し屋さんが……。

恵五郎 ああ、同業者で時々いるんだよ。お湯が沸くまでちよつと一杯、な

んて呑んだばかりに、眠り込んでそれっきりってのが。

喜助 (村松を激しく揺さぶり) もやしさん！ 元気になって、もやしさ

ん！

村松 ……揺れると……気持ち悪い……。

恵五郎 (喜助を優しく制して) すぐ良くなるよ。(村松に) だから室の中で

はあんまり長居しないようにね。

一彦 なにやってたの？ 室の中で。

村松 妙な音が聞こえた気がして……。

喜助 心配いらんよ。大丈夫。もやしはとつても利口だからね。

村松 時々聞こえるんです、あれは……。

喜助 もやしは利口だよ。お天道様が当たらない真つ暗な室の中でだって、

自分がどつちに向かって大きくなればいいのか、ちやーんとわかってるんだよ。

電話が鳴る。

十子 あたしかも！（ワンピースをとみに預け）はい、泉です。ああ！
ど
うだった？ うん……うん……。 （と、電話機ごと茶の間の外へ）

恵五郎 注文来るから、手短にな！

喜助 それからね、もやしはとつても忙しいんだよ。たったの七日間で大き
くならなくちゃいけないからね。お腹を空かした子どもたちが待つて
るからつて、急いでいるんだよ。

村松 もやしは、大人もよく食べますが。

喜助 うん。でも、もやしが急いでいるのは子どもたちのためなんだよ。お
腹を空かしているといけないからね。かわいそうだからね。おいしいお水
をたくさん吸つて、急いで大きくなるんだよ。とにかくつても急いでい
るからね、熱を出すの。

恵五郎 そうそう。放つておくと、自分が成長する時の熱で腐つちゃう。

喜助 だから毎日何度もお水をあげて、冷ましてあげなきゃいけないよ。こ
のお水がもやしのごはんにもなるんだからね。たくさんお水を吸つて、た
くさん熱を出して、急いで大きくなるんだ。もやしは偉いよ。七日で立派
に育つんだよ。早く子どもたちに食べてもらいたいんだね。お腹を空かし
て待つてるから。もやしは忙しいんだ。なんでも手伝つてあげなくちゃ。

村松 ……できる限り頑張ります……。

喜助 うん。（辺りを見回し）幹ちゃんは？

とみ （結局、ワンピースの縫い直しをしてやりながら）さつき、九里子さ
んと公園で逆上がりの練習していましたよ。

庭から九里子が現れる。

九里子 （横になつてゐる村松を見て）村松さん！ どうしたんですか？

恵五郎 軽い中毒だね。

九里子 なにを食べたんです!? 吐いちゃった方がいいです! ほら、口を開けて! 早く! (と村松の顎をつかむ)

村松 (口に指を突っ込まれそうになるのを必死で防ぎながら) 食中毒じゃ……ありませんから……!

一彦 酸欠だよ。一酸化炭素中毒。

恵五郎 休めば大丈夫だから。

九里子 ごめんなさい! あたしったら……。

村松 (顎を押さえながら) 外れるかと思った……。

一彦 九里ちゃんは力持ちなんだよ。

恵五郎 この間も幹太を逆さにぶんぶん振って、喉に詰まった飴を吐かせてくれたんだ。

九里子 あの時は、つい夢中で……。

喜助 幹ちゃんは?

九里子 表で地面にお絵描きしています。

喜助 幹ちゃん、幹ちゃん! (と外へ)

村松 ……喜助さんは、子どもが好きなんですネ。

恵五郎 うん。だから一彦のことも大好きなんだよ。

一彦 どういう意味だよ。

九里子 いつまでもお元気ですよ。今、おいくつでしたっけ。

恵五郎 六十は超えたんじゃないかな。

村松 (心底驚いて) ええーっ!

とみ そうよ、だって喜助さん、明治のお生まれでしょう?

村松 ええーっ!

一彦 変わらないよなあ。

村松 四十そこそこしじゅうにしか見えないじゃないですか!

一彦 俺が物心ついた時には、もう今とおんなじだったよ。

村松 (まだ信じられず) 六十……? ?

とみ 時計が止まってしまったのよ。

間。

とみ ……お子さんを、亡くされた時からね……。

間。

九里子 そうだ！ すみません、あたし、さっき勝手にお台所へ……。

一彦 ひよつとして、とうもろこし、九里ちゃんの？

九里子 ええ。

一彦 ごめん！ いま茹でてる！

九里子 いいんです！ そのつもりでお持ちしたんですから。

恵五郎 いつもありがとう、九里子さん。

九里子 八百屋さんが今年最後だからってたくさんおまけしてくれました。

ためしにお店で「コーンラーメン」っていうのも出してみたんですけど、評判が悪かったんですよ。井の底にとうもろこしの粒がたまって食べづらいつて。ですからほんとに……！

村松 （九里子に） ……もう、聞こえてませんよ。

九里子 （寝ている恵五郎を見て） ……ほんとだ……。

一彦 （新聞を見ながら） 兄ちゃん、カラーテレビ買わない？

恵五郎 （寝ている）

一彦 カラーでナイター中継見ようよ。幹太も喜ぶぜ、きつと。

恵五郎 （起きて） ……十子、まだ電話してるのか……？

一彦 兄ちゃん！

恵五郎 ……え？

一彦 カラーテレビ！

恵五郎 買わないよ。

一彦 長嶋の青―い髭剃り痕をカラーで見たくないの？

恵五郎 そんな理由で欲しがるの、おまえだけだよ。

とみ あんまり無理言っちゃいけないわよ。十子ちゃんのお嫁入りでなにかと物入りでしょう？

一彦 じゃあ俺も嫁に行く。

恵五郎 それよりも大学に行け。

九里子 (一彦に) どうもろこし、大丈夫ですか？

一彦 忘れてた。

九里子 あたし、見てきます。

九里子は台所へ。

入れ違いに十子が電話機とともに戻ってくる。

十子 はい、それじゃあよろしく。(電話を切る)

一彦 長いよ！

十子 大事な用事なの！

とみ (十子に) はい、直りましたよ。

十子 あら！ もう？ さすがおかあさん。

とみ ついでに裾も纏ってしまおう？

十子 あたし、佐々木のおかあさんも連れてお嫁に行きたいわあ！

九里子 (台布巾を手に戻ってきて) もうちよつとでした。台布巾、お借りしますね。

一彦 (村松に) じゃあ待ってる間にひと勝負だね。(と将棋の準備を始める)

恵五郎 もう大丈夫かい？ 松村さん。

九里子 (小声で) 「村松さん」ですよ。

恵五郎 そうだそうだ。

一彦 では一局！

十子 (村松に) 弱いわよー。びっくりするほど弱いわよ？

村松 そんなに？

十子 ふざけてるのかと思うくらい！

一彦と村松、将棋を指し始める。

九里子、新聞を片付け、ちゃぶ台の上を拭こうとして、幹太の作文に気づく。その内容に目を通すと、思わず微笑をもらし、原稿用紙をそつと畳んで茶箆筒の上に置く。

十子 そうだ、お兄ちゃん。箆筒買うのやめて電気洗濯機買うことにしたの。いいかしら？

恵五郎 好きなように遣り繰りしてくれよ。

十子 問題は買うタイミングよね。どう思う？ 村松さん。

村松 (焦って) えっ……？

十子 もう少し待ったらもつと安くなるかしら？

村松 なる……んじゃないですか？ どうしてそんなこと僕に？

十子 商売のことには詳しいんじゃないの？ だって村松さんのおうちって、大きな貿易会社なんでしょう？

村松 ……はあ？

十子 炭鉱夫だったお父さんがひと山当てて、一代で大きな会社を作った石炭成金だって。

一彦 へえ、初めて聞いたよ。

十子 お母さんは旗本の血を引くお嬢様で、お父さんとは大恋愛の末に結ばれたのよね？

村松 ……うちは製造業で、両親は見合い結婚ですが……。

十子 あら。おかしいわね。

一彦 姉ちゃん、勝手に話つくるなよ！

十子 博さんのお友達のことだったかしら？

九里子 製造業って、なにを作っているんですか？

村松 まあ……いろいろです……。

一彦 なんて家出しちゃったんだっけ？

十子 町工場こうばで働く娘さんとの結婚を反対されたって言ったわね？

村松 そんなことひとかけらも言っていない……。

九里子 確か、お父様のやり方についていけないって。

十子 そうだ。そう言った。

一彦 覚えてないなら口はさむなって。

村松 そんなところですよ。もういいですよ、僕のことなんてそれくらいで。

とみ (居眠りしている恵五郎に) 恵五郎さん、お布団で休んだら？

恵五郎 ああ……。伝票の整理しないと。

九里子 お手伝いします。

十子 それで村松さんちのテレビはカラー？

村松 ……カラー……でしたね……。

十子 いいわねえ、カラーだって！ 長嶋の青い髭剃り痕が見られるの

ね！

恵五郎 ……もう一人いたか……。

一彦 九里ちゃん！ どうもろこしは？

九里子 いけない！（慌てて台所へ）

十子 (村松に) 冷凍冷蔵庫は？ オープントースターは？ 自家用車は？

村松 まあ……ひと通り……。

とみ 十子ちゃん。あんまり人のおうちのことを……。

十子 本物ね。本物のお坊ちゃんなのね！

一彦 どうして会社継ぐのがイヤなのさ。俺が代わりに継いであげようか？

村松 ……一彦さん……。

一彦 ん？

村松 ふざけてる……わけじゃないんですよ？

一彦 なにが？

村松 ……あの……王手、なんですけど……。

九里子 （茹であがったとうもろこしを箆に載せて入ってきて） お待たせしました！

一彦 ……。 （静かに庭に下り、表に向かって行きながら） 幹太―、喜助さん、とうもろこしだぞー！

暗転。

三

同じく泉家の茶の間。

前場から唯一変化しているのは、「水」と書かれた半紙の下にもう一枚、大きく太い字で「村松」と書かれた半紙が増えていること。

ちやぶ台では恵五郎をはさんで村松と九里子が、それぞれ伝票の整理、領収書のハンコ押しなどをしている。

恵五郎はちやぶ台に突っ伏して、言うまでもなく眠っている。

九里子 （仕事の手を休め、眠る恵五郎を見て） ……いつにもましてお疲れのようですね……。

村松 一日働き通しですからね。最近は十子さんもお出掛けがちで、家事もいろいろこなさなきゃならないし。僕、恵五郎さんが布団で寝ているころ、見たことがあります。

九里子 夜中の水遣りも……相変わらず？

村松 まかせてくれないんですよ。寝てていいって。

恵五郎 （がばっと起き上がり） 水！ 水遣り忘れた！

村松 お昼の分は済んでいますよ。

恵五郎 そうか、よかった……。 （再び眠る）

九里子 ……おでこに、算盤の痕が。

村松 ええ。くつきりと。

九里子 痛くないんでしようか？

村松 眠気の方が勝つんでしよう。

九里子 心配です。

村松 ……九里子さんは、いつも心配しているんですね。

九里子 え……？

村松 人の心配ばかりしている。

九里子 ……暇なだけです……。

村松 暇とお金を有り余るほど持っていて、他人のことなんてこれっぽっちも気にかけない人間を、僕は大勢知っています。

九里子 あたし、お金はありませんから。

村松 ……ちよつとうらやましいです。そんなふう心配してもらえる人が。

九里子 村松さんのことだってあたし、いつも心配しているんですよ？ また室の中で倒れたりしていないかしら、寝坊していないかしら、足は毎日ちゃんと洗っているのかしらって。

村松 ……それは心配しているんじゃないやなくて、信用していないんでしよう……。

九里子 そんなことありませんよ！

恵五郎 (おでこをさすりながら起き上がり) ……寝ちゃったな。

九里子 領収書には全部、ハンコ押せました。

恵五郎 ありがとうございます、九里子さん。(振り返って壁の半紙を確認し)「村松」
さんもお苦勞様。

村松 ……。来月から、豆の発注を増やすというお話でしたが……。

恵五郎 これからだんだん涼しくなってくると、ラーメン屋さんの分が増えるからね。

九里子 タンメンとかサンマーメンがどんどん出るようになるんですよ。

村松 差し出がましいことを言うようですが、設備の見直しをお考えになつた方がいいのではないでしようか。こちらのように樽でもやしを作る旧式

の方法では、生産能力の増強にも限界があります。思いきってオートメーション化なさってはいかがですか？　まずは散水機を導入するべきです。設備投資は大きなご負担でしょうけれど、長期的な視野に立って予算を組んだ上で、販売管理を行えば……。

恵五郎　そうだね、（振り返って壁の半紙を確認し）「村松」さんの言うことは最もだと思うけど……。

村松　技術革新が激しい現代で、市場での優位性を確保するためには、限られた経営資源を戦略的に配分することが不可欠なんです。効率の問題ですよ。……帳簿を見せてもらいましたけど、収益に対する製造過程の負担があまりにも……つまり、労力が掛かりすぎます！　僕は自分が楽をしなくて言っているわけじゃないんです。このままでは恵五郎さんが……！

恵五郎　うん、わかってる。（振り返って壁の半紙を確認し）「村松」さんが心配してくれているのはよくわかるよ。

九里子　恵五郎さん、お席、替わりましようか。そこ、後ろから風が来るでしよう？

村松　席替えの前に提案ですが、僕はこうして目の前にいるんですから、いちいち確認してまで名前を呼んでくださらなくても……。

恵五郎　でも名前を呼ばないと、気持ち伝わらないような気がしてね。

村松　充分伝わりますから。

恵五郎　幹太も一生懸命書いてくれたし。

九里子　（半紙を眺めて）幹太君、本当にお習字が上手ですよ。

村松　お気持ちはありがたいんですが……。 「村松」はそんなに覚えにくい名前でしょうか。

恵五郎　うーん……（振り返って壁の半紙を確認し）「村松」さんを見ると、どうしても「松村」って言いたくなっちゃうんだよ。

村松　そうですか……。

恵五郎　……さっきの、「効率の問題」だけどね。

九里子　お茶淹れましようか。お湯、沸かしてきますね。

九里子は台所へ。

そこへ喜助が歌声とともに現れる。

喜助 てーんかの はーたは とーくがわにー 帰ーせし戦の せーきがは
らー くーさむす かーばね いまもーなおー 吹ーくか いーぶきの
やーまおろしー。こんにちは。

恵五郎 いらつしやい。

喜助 もやし、見てきてもいいかなあ？

恵五郎 うん、いいよ。練炭入れてるから、ちよつとだけね。

喜助 ありがとう。(と小屋の中へ)

恵五郎 ……(村松に) なんの話だっけ？

村松 効率の問題です。

恵五郎 うん。練炭をバーナーに換えるつもりではいるんだ。やっぱり命に
関わるからね。

村松 僕が言ったのは、もっと抜本的な対策を……。

恵五郎 ……割に合わないってことはよくわかってるよ。いずれは機械の力
を借りなくちゃ、うちみたいな小さい店はやっていけなくなるだろうね。

村松 いずれなんてのんびり構えていられる状況では……。

恵五郎 でもね、俺はモノを作ってるわけじゃないから。

村松 もやしは立派な商品でしよう？

恵五郎 商品か……。

村松 もやしのような低価格商品で利益率を上げるためには、まず量産です。
そのためにも日常業務の効率化を……。

恵五郎 (寝ている)

村松 恵五郎さん！

恵五郎 ……ああ、ごめん。

村松 (ため息) ……楽をしたいとは思われないんですか？

恵五郎 ……音が聞こえるって言ったね。

村松 え？

恵五郎 もやしの室から、なにか音がするって。

村松 ええ……。あれは一体……。

喜助 （小屋から戻って）ああ、楽しかったあ。

恵五郎 ずいぶん早かったね。

喜助 （きよとんと）もっと見ていいの？

恵五郎 五分やそこらは大丈夫だよ。

喜助 やった！

村松 ……（小屋に向かおうとする喜助に）喜助さん。

喜助 はい！

村松 もやしを見るのが、どうしてそんなに楽しいんですか？

喜助 可愛いから！

と、喜助は再び小屋の中へ。

それを見送る村松。

恵五郎 ……楽しなくなつて、楽しいことはあるよ。

村松 ……。

恵五郎 松村さんの言うように、商売だと割りきつてしまえばそれまでなんだけどね……。

村松 ……「村松」です……。

恵五郎 ああ、しまった！（壁の半紙を振り返り）村松ね、む、む……む……。
…。

と言いながら、「む」という口の形のまま眠ってしまう。

そこへ薬缶を手に戻ってきた九里子、村松に向かって唇を突き出して
いる恵五郎を見て当惑。

村松 (慌てて) 恵五郎さん！ 九里子さんがお茶を！

恵五郎 ああ、ありがとう。そうだ、どこかに落花生があつたんじやないかな。(と台所へ)

九里子 お台所、少し冷えてきました。

村松 喜助さんが来ています。

九里子 ええ、さつき「鉄道唱歌」が。

村松 ……もやしを見るのが楽しいそうです。

九里子 (微笑みでそれに応えてから) 村松さんは、優秀なんですね。

村松 は？

九里子 なんとかメーション、なんて難しい言葉がすらすら出てくるんですね。すごく堂々として、別人みたいでしたよ。きっと以前はこんなふうに、テキパキとお仕事をなさっていたんですね。

村松 ……。

九里子 あ、別に、今がテキパキしていないという意味ではなくて……。

村松 ……父みたいでしたか？

九里子 え？

村松 偉そうに強引で、人のことなんておかまいなしって感じがしたでしょか？

九里子 ……あたし、お父様のこと知りませんから……。

村松 ……そうでしたね。

そこへ紙袋を手に十子が帰って来る。

十子 ただいま！ ああくたびれた。歩きすぎて足が棒みたいになっちゃった。ねえ九里ちゃん、知ってた？「足が棒になる」って、棒みたいになっちゃった。ねえ九里ちゃん、知ってた。あたし、棒みたいに細くなるんだと思って、一日中歩き回っていた時期があるのよ。

恵五郎 (落花生を持って戻り) ああ、おかえり。(小屋の方に向かって) お
ーい喜助さーん! いっしょに落花生食べよう!

十子 やっぱりオーブントースターはまだ贅沢ね。代わりに魔法瓶を買って
きた。

恵五郎 別に代わりは買わなくていいんだぞ。

十子 次々に新しいものが売り出されるんだもの。目移りして困っちゃう。

九里子 ここ数年でお店もずいぶん増えましたよね。

喜助 (小屋から戻ってきて) トコちゃん、こんにちは。

十子 ねえ見て喜助さん、魔法瓶買ったの。喜助さんちには魔法瓶ある?

喜助 ううん、ないよ。うちにはね、なんにもない。

十子 やあねえ、戦時中みたいな暮らししてるんじゃないの? 今度いっし
よにお買物行きましようよ。

喜助 うーん……いい!

十子 あら、どうして?

喜助 買えないから。

九里子 はい、喜助さん。落花生の殻、剥けましたよ。

喜助 ありがとう。

十子 買えるわよー、ちよつとしたものだったら。

喜助 (首をふり) 売っているものしか買えないから。

十子 そんなの当たり前じゃない。(九里子の剥いてくれた落花生を食べる)

恵五郎 十子。おまえは自分で剥きなさい。

村松 ……(つぶやくように) 売っているものしか買えない、か……。

十子 お買物、楽しいのに。

喜助 もやし見てる方が楽しいよ。

十子 もう。お兄ちゃんとおんなじね。

九里子 喜助さん、一人でお住まいなんでしょう? 不自由なことないです
か?

喜助 うん、なんにもないよ。

十子 嘘よお。洗濯機も冷蔵庫もなかったら不便に決まってるでしょう？

恵五郎 不自由と不便は違うだろ。

十子 お兄ちゃん、そんなことばかり言ってるから新しいお嫁さんが来てくれないのよ。ねえ？ 九里ちゃん。

九里子 えっ……！

そこへスーツ姿の一彦が帰って来る。

一彦 あー、かつたるい。あー、馬鹿馬鹿しい。

喜助 一ちゃん、おかえりなさい。

一彦 ああ、こんちは。

十子 就職試験、どうだった？

一彦 どうもこうもないよ。面接でいきなり「君は自分が優秀だと思いますか？」ってこうだよ。

十子 あら、ずいぶん率直なのね。

一彦 優秀だと思ってたらおまえの会社なんか受けるかって言うんだよ。

村松 そう言ったんですか？

一彦 いや。

喜助 一ちゃんはいいい子だよ。

一彦 その通り。だから「はい」って言ってやった。

十子 なによ、それ。

一彦 あいつらが欲しがってる「優秀な新人」っていうのは、ただの「いい子」ってことだよ。大したポカもやらず、くだらない会議で当り障りのないことだけ言って、上司の指示通りに働く奴が「優秀」って呼ばれんの！
使い勝手のいい「駒」なら誰だっていいんだよ。あー、つまんねえ。俺、ネクタイ嫌いだ。(タイをはずしながら奥へ入って行く)

十子 なに怒ってるのかしら。

村松 自分がまだ、駒にしかなれないって認めるのが悔しいんですよ。

十子 あの子、将棋下手だからねえ。

村松 ……そういう話では……。

恵五郎 あいつも大人になったなあ……。

九里子 (立ち上がり) あたし、今日はこれで。喜助さんは？

喜助 幹ちゃん、まだ？

恵五郎 今日は友達のうちに行っちゃったよ。

喜助 そうかあ……。じゃあ、帰る。

九里子 それじゃ、今度の日曜日に。

恵五郎 留守番なんて別にいいんだよ？ せっかくのお休みなのに。

九里子 いいんです。暇ですから。

恵五郎 なんだか悪いね。夕方には戻るし、(やはり半紙を確認し)「村松」

さんはいてくれるからね。

九里子 はい。

恵五郎 いつもありがとう。

九里子 ……。失礼します。行きましよう、喜助さん。

喜助 さようなら！(と帰っていく)

十子 またね！ さーて着替えてこよーっと。(と奥へ)

村松 (片付けようとする恵五郎に) あ、ここは僕が。

恵五郎 そう？ じゃあボイラーに火入れてくるよ。

村松 はい。

恵五郎 (立ち去りながら) ざっとでいいからね、松村さん。

村松 ……。(壁の「村松」の字を見つめ)「松村」か……。

村松、落花生の殻を片付け台所へ。

無人の茶の間で電話が鳴る。

着替えながら慌てた様子で入って来た十子、電話に出る。

十子 はい、泉です……ああ、あたし！ うん、大丈夫。こっちは任せてお

四

暗闇の中からギターの音色。

やがて、ぼんやりと泉家の茶の間が浮かび上がる。

そこにはギターを弾いている恵五郎と、おくるみの赤ん坊を抱いてあやしているいる静子（とみと二役）。

茶の間の壁からは二枚の半紙が消えている。

恵五郎 あ！ 笑った笑った。

静子 （赤ん坊に）そう、楽しいの。よかったねえ、幹太。

恵五郎 急に熱出したからびっくりしたよ。

静子 お父さん、びっくりしたって。でも平気よねえ。幹太はお父さんに似て、丈夫ないい子だもの。

恵五郎 ……疲れたろう、静子。代わろうか。

静子 大丈夫よ。

恵五郎 ほら、幹太！ 父ちゃんとおおいで。

静子 お母さんのところがいいよねえ？

恵五郎 ずるいぞ、自分ばかり。

静子 だってせつかくご機嫌なんだから。

二人、赤ん坊の顔を眺める。

恵五郎 親父とお袋にも見せてやりたかったなあ。

静子 本当ね。

恵五郎 さて、そろそろ水遣りの時間だ。

静子 近頃、注文が増えたから大変でしょう。

恵五郎 どんどん育てて稼がないとな。

静子 ……幹太ももやしみたいに、どんどん大きくなるといいのに。

恵五郎 それじゃ一週間で大人になっちゃうよ。

静子 ……早く見たいのよ。この子が大きくなったところを……。

そこへ学ラン姿の一彦が、首から下げたカメラを大事そうに抱えて入ってくる。

一彦 静子義姉ねえさん、見て！ 友達の兄貴から安く譲ってもらっちゃった！

静子 あら、よかったわねえ、一彦君。

恵五郎 ずっと欲しがってたもんなあ。

一彦 三人でいるとこ撮ってあげるよ！ 兄ちゃん、もつと寄って！ はい、チーズ！

シャッターを切る音とともに、辺りが暗くなる。

再び明るくなると、壁に二枚の半紙が貼られたいつもの泉家。

その茶の間で、九里子がハタキを小脇に抱えたまま、アルバムに見入っている。

小屋から村松が現れ、空になった麻袋の埃をはらう。

村松 (アルバムを見ている九里子に) なに見てるんですか？

九里子 (我にかえって慌てて) 違うんです！ あの、ハタキを掛けていたら、アルバムが棚から落ちてしまっただけ！ 偶然開いたところに幹太君の赤ちゃんの頃の写真が……！

村松 へえ、どれどれ。(とアルバムを見る)

九里子 村松さん、桶はもう洗いましたか？ なにかお手伝いしましょうか？

村松 これが静子さんか。お母さんとよく似ていますね。

九里子 みなさん、そろそろお戻りになる頃かしら？

村松 優しそうな人だ。

九里子 ……。本当に。

村松 (ページをめくり) この洩はなたらしてる男の子、一彦さんじゃないですか？ ああ！ 隣に喜助さんがいる！ (アルバムを差し出し) 見てください、今とまったく変わってない！

九里子 (アルバムを取り上げ) 村松さんは変わりましたね。

村松 え？

九里子 あんなにお仕事を大変がっていたのが嘘みたいじゃないですか。

村松 大変ですよ、今だって。

九里子 でも、眠いとか、暑いとか、変な音がして怖いとか言わなくなりましたよ。

村松 怖いなんて言っていないです。ただ、妙な音がするなあって……。

九里子 ゴキブリじゃなかったんですか？

村松 ええ。もっと控えめで……不思議な音です。

九里子 お化けだったりして。

村松 (声が裏返るほど興奮して) やめてください！ お化けなんているわけじゃないじゃないですか！

九里子 ……村松さん……お化けが怖いんですか？

村松 父のせいです！ 父はどんなに帰りが遅くなっても、寝ている僕を叩き起こして毎晩、妖怪の話を……！

九里子 村松さんのことを可愛がっていらしたんですね。

村松 ……面白がっていただけです。

九里子 ……もう、お家に戻るつもりはないんですか？

村松 跡を継ぐ気がないなら出て行けと言われましたから……。

九里子 本心からおっしやったんじゃないでしょうに。

村松 「出て行けえっ！」って言われたんです。

九里子 言い方の問題でもないと思いますけど……。

村松 ……ここには迷惑でしょうか。

九里子 村松さん、悪い癖ですよ？ そんなはずないじゃありませんか。迷惑って言うならあたしの方こそ、頼まれもしないのに留守番だなんて上がりこんで、そっちの方がよっぽど……！（急に元気をなくし）やっぱり、ご迷惑だったでしょうか……。

村松 ……どうしたんです？

九里子 そうですよね……。こちらには一彦さんも十子さんもいらっしやるんだし、とみさんだつてなにかとお家のことをなさってるし、なにもあたしがでしゃばらなくて……。

村松 なに言ってるんですか。一彦さんが気持ちのいいくらい家のことをしないのは知ってるでしょう？ 十子さんだつて、結婚を控えて家電製品のことで頭がいっぱいだし。九里子さんがいなかったら、泉商店はどうなると思います？

九里子 案外、うまくいくんじゃないでしょうか……。

村松 いつもの九里子さんらしくありませんよ。

九里子 あたしみたいなのがよろちよろしてるから、恵五郎さん、いつまでたっても再婚できないって……。

村松 誰がそんなこと言ったんですか？

九里子 昨日、夢の中で長嶋選手が……。

村松 ナイター中継の見過ぎです！ そんなこと気にしないで、九里子さんはいつも通り明るく元気に……！（なぜか言葉につまる）

九里子 ……？

村松 ……恵五郎さんを、支えてあげればいいじゃないですか。

喜助が「鉄道唱歌」を歌いながら現れる。

喜助 東―寺の塔を 左にて― と―まれば七条ス―テーション― 京―都
京都と呼びた―つる― え―きふの声も― い―さましや―。……もやし
さん、どうしたの？

村松 え？

喜助 寂しそう。

村松 そんなことないですよ。

喜助 遊んであげようか？ もやしさん。

村松 ……せめて「もやし屋さん」と呼んでももらえないでしょうか。

喜助 （悩みに悩んで）うーん、もやし屋さんは恵ちゃんだからなあ……。

村松 そりゃあそうですけど、なにもそんなところで筋を通さなくても……。

僕だって従業員なんですよ？

喜助 もやしさん。

村松 「屋」を入れるだけなのに。

九里子 喜助さん、この方のお名前はね、（壁の半紙を指さし）ほら、あそこ
に書いてあるでしょう？

喜助 （見て）……水？

九里子 そつちじゃなくて……。

村松 ……もういいです。また名前が増えてしまう……。

喜助 なにして遊ぼうか、もやしさん。

村松 村松村さんと呼んでくれたこともあったのに……。

九里子 将棋がありますよ？ 喜助さんは将棋、好きですか？

喜助 はい！

九里子 あたし、お掃除終えてしまいますね。

九里子は箒を取り出し掃き掃除を、村松と喜助は将棋を指し始める。

喜助 （駒を指しながら）将棋はね、先を読むことが大事なんだよ。

村松 ええ。

喜助 ここに置いたらどうなるだろう、相手はどう出てくるだろうってね。

村松 はい。

喜助 心を読むんだ。相手の身になって考えるんだよ。

村松 はあ……。

喜助 わかったかい？ ユキオ。

村松 え？

喜助 そうすれば、ユキオだってうんと強くなれるからね。

村松 どうして……。

玄関から喪服姿の恵五郎が帰ってくる。

恵五郎 ただいま。ああ九里子さん、掃除なんていいのに。喜助さん、いらっしやい。

喜助 こんにちは。幹ちゃんは？

恵五郎 今、表でおばあちゃんに飴細工買ってもらってるよ。

喜助 行ってくる！（と外へ走っていく）

恵五郎 （村松に）ああ、ごめん。途中だったよね。

村松 それはいいんですけど……。

一彦 （すっかり着崩した喪服姿で入ってきて）あ！ なによ、村松さん。

待っててくれればお相手するのに。（と将棋盤の前へ座る）

村松 さつき喜助さん、僕の名前を……。

恵五郎 名前？

村松 ええ、ユキオって。

恵五郎 松村さん、ユキオっていうんだっけ？

村松 ……ええ。

九里子 （小声で）恵五郎さん！（と壁の半紙を指差す）

恵五郎 （半紙を見て）……ダメだなあ。

一彦 そりや偶然だね。

村松 偶然？

一彦 喜助さんの子供もユキオって名前なんだよ。将棋やってると思い出すみたいでさ、誰でもユキオにされちゃうの。俺もよく言われるよ。「わざわざ負けるような手を指して、どうしたんだ、ユキオ」って。

九里子 亡くなられたんですよね？

惠五郎 幹太ぐらいの年にね。

九里子 戦争で？

惠五郎 戦争、と言えば戦争だね。この辺りじゃ、空襲よりも終戦後の食糧難で飢え死にした子どもの方が多かったんだ。

九里子 お気の毒に……。

惠五郎 ……そうか、生きていればちょうど（チラッと半紙を確認）「村松」さんと同じくらいか。

一彦 木の枝削って、将棋の駒を作ってやったらしいよ。喜助さん、優しい父ちゃんだったんだろうな。

そこへ黒いワンピース姿の十子が帰ってくる。

十子 なあに？ まだ着替えてないの？

一彦 ああ、せつかくのいい話が……。

十子 お兄ちゃん、さっきの話、いいわね？

惠五郎 困るよ、そんなこと言われても。

十子 お仲人さんから是非についてお話なのよ？ 断ったりしたら博さんが困るんだから！

惠五郎 （村松に）ボイラー入れてくれた？

村松 はい。あとやっておきますよ。

惠五郎 じゃあお願いしちやおうかな。

十子 聞いているの？ お兄ちゃん。

恵五郎 着替えてくる。(と奥へ)

十子 ちよつとお兄ちゃん！(と追いかける)

村松 (二人を見送り、一彦に) なんの騒ぎですか？

一彦 見合い見合い。

九里子 えっ！

一彦 相手も再婚……いや、三度目って言ったかな？ とにかく男運がない人らしいよ。子どもがいようが金がなかるうが、誠実な人ならなんでもいんだって。で、めぐりめぐって、子どもがいて金のない兄ちゃんに白羽の矢が立ったと、こういうわけだ。

九里子 そうですか……。

動揺を隠せない九里子、無秩序に辺りを掃き散らかす。

そんな九里子が気に掛かる村松。

そこへ喪服姿のとみが帰ってくる。

とみ 二人で公園にいったわ、飴を舐めながら。

一彦 (とみに) だけさあ、なにも静子義姉さんの七回忌に、見合い話なんて持ち出さなくてもいいと思わない？

とみ ちよつどいい区切りじゃないの。静子にもきちんと報告できるし。(仏壇に手を合わせる)

一彦 姉ちゃんにはデリカシーつてものが欠けてるよ。

とみ 恵五郎さんだっていつまでも独りつてわけにはいかないでしょう。

一彦 ドライだねえ、女性陣は。……九里ちゃん。

九里子 はいっ！

一彦 (むせながら) 埃がすごいんだけど。

九里子 ごめんなさい！

見合い写真を手に、十子がものすごい形相で戻ってくる。

十子 お兄ちゃんは!?..

一彦 着替えてんだろ?

十子 いないのよ! 逃げたわね。

村松 恵五郎さん、乗り気じゃなさそうでしたよね……。

十子 写真を見れば気が変わるわよ。

十子、見合い写真を開いて見せる。

その場の四人、写真を覗き込む。

とみ、そして一彦の顔色が変わる。

一彦 ……嘘だろ?

十子 樋口八重さん。ね? そっくりでしょう? 静子お義姉さんに。

一彦 おばちゃんの親戚?

とみ いいえ……。

十子 こんないいご縁、二度とありっこないんだから。お兄ちゃんには、首に縄をつけてでも会ってもらいますからね!

九里子 (箒を片付け) あたし、これで失礼します……。

十子 お留守番ありがとう。九里ちゃんにも今度、いい縁談があつたら紹介してあげるわね。

一彦 迷惑だよなあ? 九里ちゃん。

九里子 お邪魔しました……。

村松 (帰っていく九里子に) 九里子さん! 長嶋になにを言われても、気にしちゃダメですよ!

一彦 なに? 長嶋って。

村松 なんでもありませんけど……。

喜助 ただいま! ……九里子さん、どうしたの? 寂しそう。

九里子 さようなら、喜助さん…… (退場)

喜助 さようならー！

とみ (喜助に) 幹ちゃんは？

喜助 恵ちゃんと銭湯に行っちゃった。

十子 もう！ お兄ちゃんてばー！ (奥へ行きながら) 一彦！ とつとつ着

替えなさい！ 皺になっちゃうでしょ！

一彦 俺に八つ当たりするなよ。(と奥へ)

喜助 (にこにこ) トコちゃん、こわーい。

とみ ねえ、喜助さん。ちよつとこれ見てください。(と写真を見せる)

喜助 だあれ？

とみ 恵五郎さんのね、お嫁さんになるかもしれない人。

喜助 ふーん。

とみ ……誰かに似ていると思います？

喜助 ……わかんない！

とみ そう……。

喜助 静子さん、元気？

とみ え？

喜助 静子さん、元気かなあ。

とみ ……多分ね、今はもう。遠い所で元気になっていると思いますよ。

喜助 よかった。静子さんの煮物、おいしいね。時々くれたの、とってもお

いしかった。

とみ うちにカボチャを煮たのがありますけど、喜助さん、召し上がる？

喜助 はい！

とみ じゃあ、ちよつと寄っていつてくださいな。(村松に) みんなによるし

く言ってくださいね。

村松 はい。

喜助 もやしさん、さようなら。

村松 ……ユキオですよ。

喜助 ん？

村松 いえ……。さよなら、喜助さん。

喜助 さようなら！

とみと喜助、帰っていく。

一人残された村松、アルバムを出してきて、見合い写真と見比べる。
そこへ電話が鳴る。

村松 (出て) 泉商店です。……あ……。どうしてここが……。ええ、ちや

んと食べていますし、体はなんとも。……わかりました。わかったから、
もう掛けてこないで。……こっちから必ず、うん……。わかってるよ、お
母さん……。大丈夫ですから……。

十子が茶の間に入ってくる。

村松 (慌てて) それでは！(と電話を切り) 間違い電話でした！

と、取りつくろうやいなや、さらにあたふたとアルバムや見合い写真
を片づけ始める。

そんな村松を不思議そうに十子が見つめる中、暗転。

五

泉家の茶の間。

とみが幹太のズボンに継ぎあてをしている。

一彦は電話で話をしている。

一彦 わかりました。そう伝えておきます。それじゃ。(切る)

とみ 注文？

一彦 ずいぶん買い叩かれてるみたいだな。機械で大量生産されたもやしが入安く出回るようになったからね。

とみ スーパーマーケットなんていう大きなお店も増えているし、小さいところはこれからどこも厳しいんでしょね。

一彦 泉商店も、いつまでもつことやら。

とみ ……就職、まだ決まらないの？

一彦 返事待ち。多分、ダメじゃない？

とみ そんなのんきなこと言って。少しは恵五郎さんの力になってあげなきゃ。

一彦 兄ちゃん、どうなったかな。

とみ ……一彦君もついていたらよかったのに。

一彦 俺が見合いするわけじゃないもん。

とみ お義姉さんになるかもしれない人よ？

一彦 俺の予想では、兄ちゃんはきつと……。

とみ ……なあに？

一彦 寝てるね。

とみ まさか。

一彦 絶対寝てる。十分以上目を開けて座ってられっこないよ。なにしろ兄ちゃんの尻にはスイッチがついてんだから。

とみ スイッチって？

一彦 あれ？ 幹太は？

とみ 九里子さんのところよ。喜助さんに作ってもらった竹とんぼ見せるんだって。

一彦 なんだよ、俺には見せてくんないのかよ。

とみ ……本当はね、九里子さんみたいな人が、恵五郎さんのお嫁さんになつてくれるといいなって思っていたんだけど……。

一彦 ……あの人、気にいらない？

とみ ……あんなに似ているとね、なんだか、静子が生きていたことが、嘘のようになってしまふ気がして……。

一彦 幹太、憶えてないだろうからな。

とみ ……。一彦君、最近、写真機いじってないのね。

一彦 ん？ ああ。

とみ ちょっと前までは、近所をぶらぶらしながらよく写真撮っていたのに。

一彦 おもしろかったからね。世の中がどんどん変わっていくのが。

とみ 今は？ 飽きちゃった？

一彦 変わってく早さについていけなくなったのかな。今のうちにあれも撮っておかなきゃ、これも撮っておかなきゃって、焦っちゃってさ。

とみ でも、そうやって撮っておけば、あとで貴重な写真として残るでしょうに。

一彦 それもねえ。なんか、形見集めてるみたいでさ。楽しくないのよ。

とみ そう……。

一彦 現像代もおっつかないしね。そう言えば、まだフィルム残ってたかもな。(と奥へ)

歌声とともに喜助が現れる。

喜助 おーもえば ゆーめか とーきの間にー 五十三次ー はーしりきて

ー 神戸のやーどに 身ーをおくもー ひーとにつーばさの 汽ー車の恩

ー。とみさん、お鍋返しに来ました。

とみ あらまあ、わざわざすみません。

喜助 お家、留守だったから。

とみ お口に合いましたか？

喜助 とってもおいしかった。静子さんとおんなじね。

とみ 私が教えたんですもの。私がいなくなった後でも、困ることがないよ うにって。

喜助 じゃあ、静子さん、困ってないね。

とみ ……そうだといいんですけどね。親よりも先にいつてしまつて……。

できることなら、代わつてやりたかつたんですけど……。

喜助 代わつてあげるよ。

とみ え？

喜助 いつかユキオとね、代わつてあげるんだよ。もう食べ物がたくさんあるからね。恵ちゃんもやしをくれるから。

とみ ……そうですか。喜助さん………そうでしたか。

一彦 (カメラを手に戻つてきて) あ！ 喜助さん、ちょうどよかった。写真撮つてあげるよ。

喜助 はい！

喜助、その場で直立不動。

一彦 そんなに硬くなんなくてもいいんだけど。

喜助 (力みに力みながら) まだ？

一彦 もつところ、ポーズをつけたりさ。

喜助 一ちゃん、まだ？

とみ 早くしてあげたら？ 大変そうだから。

一彦 はい、じゃあチーズ。(シャッターを切る)

喜助 (大きくほーつとため息をつき) 面白かった！

一彦 ええっ？ そうだった？ じゃ、おばちゃんも一枚……と、残念！

今ので最後だ。

そこへワンピース姿の十子がどかどかと帰ってくる。

十子 ちよつと、佐々木のおかあさん聞いてよ！ お兄ちゃんたらひどいの

よ！ お見合いのあいだ中、ずーっと居眠りしてたんだから！

一彦 (とみに) ほらね？

十子 お仲間さん、呆れて口開けてたわよ！

背広姿の恵五郎が入ってくる。

恵五郎 あれが普段通りの俺なんだからしようがないじゃないか。

十子 普段通りにもほどがあるでしょ？

恵五郎 がんばっていろいろ話したつもりだけどなあ。

十子 お見合いの席で「戦後にもやし屋がひろまった理由」なんて語り出す人がどこにいるのよ！ この調子でたまに目を開けても、もやしの話ばかり！

恵五郎 結構、興味深そうに聞いてなかったか？ なんだっけ……田淵さん？

十子 樋口さんでしょ！ もうやだ！ あたし、お兄ちゃんと縁切りたい！

恵五郎 まあ、そう心配しなくても、おまえは直に泉家じきの人間じゃなくなるんだから。

十子 博さんが出世できなかつたら、お兄ちゃんのせいだからね！

一彦 結局そっちの心配かよ。

恵五郎 博さんには、あとで俺からも謝っておくよ。

とみ じゃあ……今回はダメだったの？

十子 当たり前じゃない！ もう、お兄ちゃんの馬鹿！ これで博さんとも気まづくなつたらどうしてくれるの？

喜助 トコちゃん、お洋服きれい。

十子 ありがとう喜助さん。この日のためにね、一生懸命縫ったの。

一彦 最後はおばちゃんがね。

十子 うるさい一彦！ 就職決まったの？！

一彦 もー、馬鹿のひとつ覚えみたい……。

十子 馬鹿はお兄ちゃんなの！

とみ まあまあ十子ちゃん、こういうことはご縁だから……。

十子 お兄ちゃんなんて、もやしと結婚すればいいのよ！

恵五郎 はいはい。じゃあお嫁さんの顔でも見てくるかな。

十子 なによー！ さっきまでグーグー寝てたくせにー！

恵五郎が小屋に入っついでいこうとすると、中から村松が飛び出して来る。

村松 ああ！ 大変です！

恵五郎 どうしたの？

村松 もやしが腐ってるんです！

恵五郎 どのもやし!?

喜助 大変だ！

村松と恵五郎、続いて喜助も小屋の中へ。

十子 居眠りしたバチが当たったのよ。

とみ これ、いけませんよ。

一彦 俺、フィルム出してこようかな。（と庭に下り、ふと外の方を見て）

あれ？ 九里ちゃん、なにしてるの？ あがっておいでよ！

椎茸の載った箆を手に、九里子がこそこそと現れる。

九里子 あの……田舎から椎茸をたくさん送ってきたものですから……。幹

太君に持って行ってもらおうとしたら、お友達と遊びに行っちゃって……

……。

一彦 いつも悪いねえ。

十子 ちよつと九里ちゃん、聞いてよ！

一彦 （うんざりと）えー、また最初からー？

十子 お兄ちゃんは結婚しない、一彦は就職しないじゃ、あたしお嫁に行けないわ！

一彦 嘘つけ。這ってでも行くくせに。

九里子 今日、恵五郎さん、お見合いの……。

とみ ダメだったらしいのよ。もやしの話ばかりしていて。

十子 ほとんど居眠りしてたのよ!! 信じられる？

九里子 それはもう、あっさり信じられますけど……それで、恵五郎さんは？

十子 今、縁結びの神様の罰を受けてるわ。

とみ 十子ちゃん！

一彦 (九里子に) もやしが腐っちゃったみたいでさ。

九里子 ええっ！

小屋の中から、恵五郎、喜助、がっくり肩を落した村松が出てくる。

喜助 よかったね。ちよつとだけだったね。

村松 すみません。きつと水の温度が高すぎたんです……。

恵五郎 気にすることないよ。あれぐらいならよくあるんだ。下の方はね、どうしても熱がこもっちゃうから。

村松 僕の不注意です……。

恵五郎 いや、むしろよく気がついてくれたよ。放っておいたら四日目のもやしが全滅するところだった。

村松 いたら誰だってわかります。すごい臭いでしたから……。

恵五郎 それでもさ。

喜助 もやしさん、お手柄、お手柄。

十子 村松さん！ 聞いて！

一彦 聞かなくていいよ、村松さん。

十子 一彦も来ればよかったのよ！ そうしたらあたしがどれだけ恥をかい
たかわかるから！

恵五郎 まだその話か……。

村松 そう言えば、お見合いは……。

恵五郎 うん、嫌われたらしい。

十子 嫌われるようなことをするからでしょう!!

とみ 十子ちゃん、いいかげん落ちついて。

村松 本当にすみませんでした。こんな大事な日に……。

恵五郎 いいからいいから。

喜助 九里子さん、こんにちは。

九里子 こんにちは。幹太君の竹とんぼ見ましたよ。喜助さん、手先が器用

なんですね。

一彦 (恵五郎に) 権茸もらったよ。

恵五郎 ああ、いつもありがとう。

喜助 (村松に) もやしさん、大丈夫? 元気出して。

恵五郎 ほんとだよ? あんなの失敗のうちにはいないから。

喜助 (ポケットからくしゃくしゃのハンカチを村松に差し出し) はい。

村松 (丁寧に戻させ) 泣いてませんから。

とみ 真面目な方なのね、村松さんは。

十子 いっそ村松さんお見合いしない? 誠実な人なら誰でもいいらしいから。

村松 僕は誠実な人なんかじゃありませんよ。

十子 あら、そうかしら。

村松 ……つまらない嘘もつくし。

とみ 村松さんはきちんとしていい方ですよ。

九里子 そうですよ。

村松 ……こちらのみなさんは……やさしいですね。

一彦 それは勘違いだよ。さっきの姉ちゃんの怒りよう、見たでしょ?

村松 僕は今まで、ミスをした時に……。

恵五郎 ミスなんかじゃないよ。事故みたいなものだ。

村松 ……こんなふうには、慰められたことなんてなかったですよ。

十子 意外ねえ。ちやほやしてくれる人が周りにたくさんいたんじゃないの？

村松 いましたよ……。そんな人しかいませんでした。

とみ ご両親は？

村松 父は「俺が掟だ」という人ですし……。

九里子 お母様は？ 心配なさっていないんですか？

村松 ……心配しています。僕が、父の思い通りにならないことを。

一彦 なんだか息苦しそうだなあ。

村松 とにかく、僕のことをわかってくれる人間なんていないんです。

十子 あら、だめよ。そんな寂しいこと言っちゃあ。

九里子 そうですよ。村松さんをわかってくれる人は必ずいます！

とみ まだ出会っていないだけですよ。

喜助 会えなくてもね、どこかにいるよ、きっと。

一彦 それでも会えなかったらさ、「確かにいたんだよなあ、俺をわかってくれる人が。とうとう会えなかったけど」って思えばいいんじゃない？

恵五郎 そんなことより、自分がわかってあげるよって誰か名乗りをあげようよ。

十子 それもそうね。

一彦 じゃあ、村松さんのことをわかってあげる方、挙手をお願いします！

村松以外の全員、手を挙げる。

村松 (苦笑) ……ありがとうございます。

喜助 (村松に) よかったね。

十子 でも、なんで会社継ぐのがイヤなの？ わからないわあ。

一彦 姉ちゃん！ 満場一致が台無しだよ。

喜助 それじゃあ、行きます。

恵五郎 帰るの？ もやし持っていかない？

喜助 うん、いらぬ。

恵五郎 腐ってないやつだよ？

喜助 ありがとう。いい！

恵五郎 そう？

とみ それじゃ私も。(と立ちあがる)

一彦 あ！ 俺も。フィルム出しにいくんだ。ちょっと待ってて。

喜助 先に行く。

一彦 待っててよ。財布取って来るだけだからさ。

喜助 先に行くよ。とみさんも一ちゃんもね、あとからゆっくり来て？

とみ そうですか？

喜助 さようなら。

全員、口々に喜助に別れを告げる。

喜助は「鉄道唱歌」を歌いながら帰って行く

喜助 明ーけなば さーらに乗ーりかえてー さーんようどうをー すーす

まましー てーんきは あーすも 望みーありー やーなぎに かーすむ

つーきのかげー。

一彦 ……用事でもあるのかな？

とみ さあねえ……。

恵五郎 着替えてこよう。(と奥へ)

十子 あたしも。(と恵五郎に続く)

恵五郎を目で追っていた九里子、村松と目が合い、微笑みかける。

ゆっくりと暗転。

曇天の下の泉家。

井戸の脇の洗い場で、村松がタワシで桶を洗っている。

そこへ九里子が現れる。

九里子　こんにちは。なんだかすつきりしないお天気ですね。ひと雨降りそう。

村松　みなさん、お出掛けですよ。

九里子　そうですか。あ、それ、あたしも洗います。

九里子も桶を洗い始める。

九里子　村松さん、このひと月ですっかりお仕事に慣れたみたいですね。

村松　相変わらず、夜中は寝ています。

九里子　だってその証拠に、恵五郎さん、こうして安心してお留守を任せてらっしゃるじゃないですか。

村松　そうだといいんですが……。

九里子　そうに決まっていますよ。

村松　……僕なんかには仕事を任せなきゃならないほど、状況が厳しいのかもしれない。

九里子　状況って？

村松　練炭をバーナーに換えることすら苦しいってことです。

九里子　……そうなんですか？

村松　学校給食のような大口は、値段を下げないと取引が難しくなっているみたいですよ。おまけに、最近はこの辺りも下水道が完備されて、それに伴った水道料金が掛かる。

九里子 ……どうしたらいいんでしょう？

村松 住込みの従業員を雇う余裕は、もうないのかもしれませんが。

九里子 そんな……。

村松 手っ取り早いですからね。人件費の節約は。……ただ、それも応急処置でしかないとは思いますが……。

九里子 恵五郎さん、もやし屋をやめたりしないですよ？

村松 ……赤字を生むためだけの経営では、商売の意味がありません……。

九里子 あたし、困ります！

村松 ……。

九里子 ……あたしというか……うちの店が困ります……。

そこへ「ごめんください」という声とともに、かっちりとしたスーツに身を包んだ樋口八重（とみ・静子と三役）が姿を現す。

九里子 あ……。

八重 こちらは泉さんのお宅ですか？

村松 樋口……さん？

八重 ……。わたくしのことをご存じなんです。あなたは？

村松 この従業員で、村松です。

八重 村松さん。（九里子に）あなたは？

九里子 高野といいます。あたしは……ただのお手伝いです……。

八重 樋口八重です。（村松に）わたくしのことを、他にもなにか？

村松 先日、恵五郎さんとお見合いを……。

八重 他には？

村松 誠実な方をお探しだとか……。

八重 その理由も？

村松 ……男運がないと……。

九里子 村松さん！

八重 大変正確な情報です。借金まみれの博打打ちやら、大酒のみの浮気者
にしか、これまで縁がありませんでした。

村松 あの、恵五郎さんでしたら、今、出かけていて……。

八重 結構です。突然で申し訳ないんですけど、もやしを見せていただけま
せんでしょうか？

村松 もやし？

八重 ええ。こちらで作っていらっしやるとか。

村松 ……もやしを、ご覧になりいらしたんですか？

八重 そうです。お差支えがなければの話ですが。

村松 お差支えは……ありません。こちらです。どうぞ。

村松、八重を小屋に案内すると、すぐに一人で戻ってくる。

九里子 どういうことでしょうか？

村松 わかりません。一人にしてくれて。

九里子 本当に、静子さんにそっくり……。

村松 お見合いで居眠りされたことに腹を立てて仕返しにきたんでし
ょうか？ だったら一人にさせちゃまずいなあ。

九里子 やっぱり、恵五郎さんと結婚する気になったとか……。

村松 それで現場の視察に？

九里子 他に考えられますか？

村松 うーん……。

八重が小屋から出てくる。

八重 ずいぶん蒸し暑いところなんですネ。

村松 もやしには最適なんです。ゴキブリがいませんでしたか？

八重 ……気づきませんでした。なにしろ暗くて。

村松 よく出るんですよ。たまにネズミとか。

八重 そうですね。

村松 あんなどころで長時間、長靴を履いていますから、足が臭くなります。

水仕事なので、すごく手も荒れますし。

八重 大変なお仕事のようですね。

村松 ええ。夜中も働きづめで寝る暇ありませんし。

八重 よくお体が持ちますね。

村松 僕は寝ていますが……。

八重 そうですね。

村松 おまけにまったく儲かりません。こんなうちに嫁いできたら大変です。

八重 ……なにか、誤解なさっているんじゃないやありません？

村松 え？

八重 わたくし、本当にもやしを拝見しに來ただけですから。お忙しいところ、ありがとうございます。

九里子 あの……！

八重 はい？

九里子 いかがでしたか？ もやしをご覧になって。

八重 ものすごく期待してきたんですが……正直、それほどでも。

村松 期待？

八重 泉さんがおっしゃっていたんです。もやしは、天候に影響されず、町なかの小さな狭い場所でも短期間に育てることができる。だから、都心の人たちにも、新鮮な野菜を安定供給できるよう広まった素晴らしい食べ物だ。安くておいしい食事のためにぐんぐん育つもやしを見ていると、イヤなことなんてきれいさっぱり忘れると伺ったものですから。

村松 忘れたい、イヤなことがおありなんですか？

八重 ええ。女性が男性と対等に働こうとすれば、それはもううんざりするほど。

九里子 忘れられませんでしたか？

八重 残念ながら。

九里子 そうですか……。

八重 あなたは？

九里子 はい？

八重 高野さんでしたね。あなたには、もやしの素晴らしさがおわかりになる？

九里子 あたしは……おいしいなって思う程度で、素晴らしさなんてわかりませんし、恵五郎さんがどうしてあれほどやしを大事にできるのかもわかりません。でも……。

八重 でも？

九里子 ……恵五郎さん……泉さんが、どれほどやしのことを大事に思っているのかは、わかっているつもりです……。

八重 ……お邪魔いたしました。どうぞお仕事にお戻りください。

村松 なんのお構いもしませんで。

八重 (帰ろうとして、ふと) あとから聞いたことですが、わたくしのこの顔、泉さんの亡くなった奥様にそっくりだそうですね。

村松 僕らは、奥さんのことはよく知らないんですが……。

八重 迷惑な話です。

村松 はあ……。

八重 わたくしにも、亡くなられた奥様にも。

村松 それはまあ……そうかもしれませぬね。

八重 ……泉さんは、ずっと居眠りなさっていました。

村松 伺っています。

八重 たまに目を開けてもやしの話をなさる時も、わたくしの顔を見ないよ
うに見ないようになさっていました。

村松 それは……初めて伺いました。

八重 ……誠実な方だと思いました。

間。

八重 残念です。わたくしは本当に男運がなくて。

村松 ……あの……室の中で、なにか聞こえませんでしたか？

八重 はい？

村松 聞いているうちに、なんだかこう、少しだけ気持ちが悪く落ち着くような

……とても小さな音なんですけど……。

八重 いいえ、なにも。本当にありがとうございました。失礼いたします。

凜々しく帰っていく八重の後ろ姿を見送る村松と九里子。

九里子 (空を見上げ) あ……雨。

慌てて桶を片付け始める二人。

そこへ電話が鳴る。

村松 (桶を運びながら) すみません、九里子さん。出ていただけますか？

九里子 はい！

九里子、茶の間にあがって受話器を取る。

九里子 はい、泉商店です。……ああ、町内会長さん。九里子です。今、ち

よっとお留守番を……ええ。……はい。……え？

村松、軒下に駆け込んできて、雨の雫を払う。

九里子 ……え……だって……。ええ？

村松 (九里子の様子がおかしいのに気づいて) どうしました？

九里子 (受話器を押さえ、呆然と) ……喜助さんが……。

雨の音。

暗転。

七

暗闇の中で、帽子をかぶり、長靴を履いた若き日の恵五郎がしゃがみこんでいる。

暗闇の奥から、喜助が姿を現す。

喜助 水遣り終わった？

恵五郎 (ふてくされた様子で) 終わったよ。

喜助 ……どうしたの？ 恵ちゃん。

恵五郎 なんだか馬鹿馬鹿しくなっちゃってさ。なんでもやしの生活に合わせるとこんな苦労しなきゃならないんだよ。

喜助 こうやって面倒見てあげなきゃ、もやしは大きくなれないんだもの。

恵五郎 なんで俺、店を継ぐなんて言っちゃったのかなあ。他にやりたいこといっぱいあったのに。大体、こんなに蒸し暑いところでこんなに長靴履いてたら、足が臭くなっちゃうよ。

喜助 もやしが嫌いになっちゃったの？

恵五郎 もうイヤだよ。もやし作りなんて。

喜助 ……恵ちゃん、こっちきてごらん。

恵五郎 なに？

辺りが闇に包まれ、その中から「鉄道唱歌」をゆっくりと奏でるギタ

ーの音が聞こえてくる。

夜。泉家の茶の間では、恵五郎が一人、ギターを弾いている。

そこへ喪服姿の一彦と村松が帰って来る。

恵五郎 おかえり。

一彦 「てっきり眠ってるのかと思った」って言ってたよ、公園で最初に見つけた人。まったく喜助さんらしいよな。

恵五郎 誰かを待ってたのかな。

一彦 さあねえ。

村松 (恵五郎に) 礼服、お借りしてしまつてすみませんでした。

恵五郎 いいんだ。水遣りがあつたし、俺は明日の葬儀の方に出るから。一彦、手紙来てるぞ。

一彦 どこから？

恵五郎 なんとか株式会社。

一彦 (ちゃぶ台の上にあつた手紙を開封し、中身に目を通して) ちえつ。

村松 なんでした？

一彦 (手紙を見せて) 「内定を通知す」。

村松 ああ、おめでとうございます。

一彦 ……なんだよ、よりによってこんな日に。デリカシーに欠けるねえ。姉ちゃんとおんなじだ。

恵五郎 ちゃんと大学卒業しろよ？

一彦 ……。村松さん、飲みに行こうよ！

村松 え？

一彦 送別会だよ。さらば喜助さん！さらば、我が青春時代！

村松 え…でも…。

恵五郎 行つておいでよ。

村松 じゃあ、着替えてから。

一彦 いいよ、そのまま。俺ひとり喪服じゃカッコ悪いじゃん。

村松 一彦さんも着替えればいいじゃないですか。

一彦 だって悲しいお別れ会よ？ いいんだよ、この格好の方が。いいよね？
兄ちゃん。

村松 ですけど……。

恵五郎 いいよ。行っておいで。

一彦 ……。俺さ、兄ちゃんみたいにはなりたくないって思ってたんだ。

村松 ……なにを言い出すんですか、藪から棒に。

一彦 ほんとだよ。ずっと思ってた。大学もあきらめて親父の跡継いで、寝る暇もなくもやしの世話ばかりしてる兄ちゃんみたいな人生は真っ平だ
って。

村松 一彦さん、もう酔っ払ってるんじゃないか……。

恵五郎 知ってるよ。

一彦 ……知ってたか。

恵五郎 うん、知ってたよ。おまえ、寝言でも言ってたし。

一彦 そうか……。

村松 一彦さん、それはあんまりんじゃないですか？ 恵五郎さんが一彦
さんや十子さんのためにどれだけ……。

一彦 だからさ、そういう誰かの犠牲になる生き方なんて、俺にはできない
なって。

恵五郎 やらなきやいいさ。

一彦 だからってサラリーマンになるのも気がすまなくてなあ。

村松 だけど、こうして内定も貰えたわけだし……。

一彦 命令通り歯車になって働いてれば、生活は保証される。兄ちゃんの代
わりに、今度は会社が守ってくれるってわけだ。それってどうなの？

恵五郎 だったらカメラマンでもなんでも目指せばいいだろう。

一彦 俺にそんな才能はない。

恵五郎 それぐらいの分別はあるんだなあ。

一彦 とにかく！ 俺は兄ちゃんみたいになりたくないの！

村松 一彦さん！

一彦 でも兄ちゃんには、今のままでいてほしいの！

村松 言ってること無茶苦茶ですよ！

一彦 ……もやし屋やめるなよ。

村松 え……？

一彦 俺はもう、もやしなんて食べ飽きてるからいいんだよ。けど、喜助さんが……。

惠五郎 ……一彦。

一彦 だって喜助さんは、もやしが好きだっただろ？

惠五郎 おまえ、いくつになった？

一彦 ……年男。

惠五郎 十二歳か。

一彦 掛ける倍だよ。

惠五郎 いつまで兄ちゃんに甘えてんだ。

村松 ……今のは、甘えていたんですか？

惠五郎 そうだよ。

村松 なんて複雑な甘え方なんだ……。

惠五郎 一彦は甘ったれの寂しがりでね。だから喜助さんは、誰よりもこいつを可愛がってたんだ。

一彦 幹太にとって代わられたけどね。

惠五郎 ……やめないよ。

惠五郎、ギターの弦を爪弾く。

惠五郎 やめないよ、もやし屋。せめて幹太が大きくなるまではね。……だ

から一彦は新しい場所で、やりたいことやってみる。

一彦 会社でやりたいことなんてないよ。

惠五郎 行ったこともないくせに。

一彦 就職した奴らを見てればわかるよ。あいつらはなにも考えてない。そうでなきや、あんな人殺しみたいに混んでる電車で毎日乗れるわけがないんだ。

恵五郎 満員電車に乗りたくないだけじゃないのか？

一彦 ……俺はさ、ずっと考えてたんだよ。

間。

一彦 どうして喜助さんはあんなふうになっちゃったのか、ずっと考えてたんだ。子どもを亡くしたせいだっつてのはわかる。それが戦争のせいだつてのもわかる……。そこから先なんだよ。でもみんな、あれは不幸な過去だったから忘れようって言うだろ？ なんでだよ？ じゃあそれができない人はどうすんだよ？ 忘れられなかった喜助さんが悪いのかよ！ わかんないよ！

恵五郎 わかるよ。

一彦 なにが！

恵五郎 おまえが、喜助さんを好きだったつてことだけはわかる。

一彦 ……俺にはまだわからないんだ。だから、言われたことだけやるような仕事について、これ以上頭が悪くなるのは困る。

恵五郎 それは俺も困るなあ。

村松 じゃあ、就職はしないんですか？

一彦 するよ。兄ちゃんに今までの借りを返さなきゃならないからね。頼んで作った借りじゃないけど。

恵五郎 いよいよダメだったら、もやしを手伝ってくれればいいよ。

一彦 チクショー、絶対出世してやる！ 歯車になんかならないぞ。

村松 会社の中にだって、一彦さんが一彦さんらしくいられる場所がありませんよ、きつと。

一彦 村松さんとこの会社はどうなの？

村松 え？

一彦 自分らしくいられる場所があるの？

村松 それは……。

一彦 あるんなら入れて。

恵五郎 飲みに行くんじゃないのか？ 店、閉まっちゃうぞ？

一彦 じゃ、続きは飲み屋でゆっくりと。

恵五郎 つきあわせちゃって悪いね。松村さん。

村松 ……いいえ。

恵五郎 ……今、俺、ちゃんと名前言えた？

一彦 言えたよ。いつも通り「松村さん」で。

恵五郎 (半紙を見てから) 本当にごめん。いい加減、怒るよね？

村松 いいんです。

恵五郎 いや、よくないよ。

村松 いいですよ。「松村」で。

そこへ喪服姿の九里子がハンカチで鼻を押さえながら入ってくる。

一彦 あれ？ 他のみんなは？

九里子 まだお通夜のお手伝いを……。あたし、泣いてばかりで役に立たな

いから、荷物を持って帰るように言われて……。

一彦 これからお別れ会だけど、九里ちゃんも来る？

九里子 いいえ、あたしは。

一彦 じゃあ行ってくるね。

村松 ……いってきます。

九里子 行ってらっしゃい。お気をつけて。

一彦と村松、揃って出かけていく。

九里子 とても大勢の方がおみえになっていました。子どもたちもたくさん……。

恵五郎 喜助さん、人気者だったからね。

九里子 あの遺影、一彦さんが撮られた喜助さんの写真……つい先週のものですよね？ あたし、どうしてもまだ信じられなくて……。

恵五郎 ……九里子さん。

九里子 はい……。

恵五郎 もやし見に行こうか。

九里子 え？

恵五郎 ……うん、行こう。

九里子 恵五郎さん、あの……。

恵五郎 おいで。

恵五郎の後について、九里子も小屋に入っていくと、辺りの景色も小屋の中の闇に包み込まれるように暗くなる。

やがて、暗闇の中に恵五郎と九里子の姿が、ようやくそれとわかる明かりの中に現れる。

恵五郎 足元、気をつけてね。滑りやすいから。

九里子 あたし、室の中まで入ったのは初めてかもしれません。

恵五郎 あれ？ そうだった？

九里子 ええ。……本当に蒸し暑いですね。もやしが熱を出してるから？

恵五郎 十子が言うには、「運動部員の男子でいっぱい満員電車にいるよ
うだ」って。

九里子 確かにそんな感じもします。

間。

九里子 ……静かですね。

恵五郎 うん。

九里子 ……？ なにか……音がします。

恵五郎 うん。もやしの音だ。

九里子 もやしの？

恵五郎 もやしが育っている音だよ。水を吸って、ひしめき合いながら大きくなっていく音が、こんなふうに聞こえるんだ。

九里子 もやしの、音……。

恵五郎 夜の方がね、よく聞こえる。これが聞きたくて、松村さんには夜中の水遣りを譲れなかった。

九里子 ……「村松さん」ですよ？

恵五郎 ……どうしても覚えられない。

九里子 ひっくり返すだけなのに。

恵五郎 だって彼、「松村」って顔してると思わない？

九里子 なんとも言えません……。

恵五郎 俺だけか……。

九里子 ……恵五郎さんはいつも、この音を聞いてらしたんですね。

恵五郎 そう、いつもね。家族が増えた時も、いなくなった時も、いつもいつもここにいて、この音を聞いてたな。

九里子 イヤなことも、きれいさっぱり忘れられる……。

恵五郎 ……話したことあったっけ？

九里子 いえ……。

恵五郎 最初はね、イヤだったんだ。こんな仕事。

九里子 え……？

恵五郎 大学にも行きたかったし、ギターの勉強もしたかったけど、親に泣きつかれて仕方なく始めたんだ。だから文句ばかり言ってたんだよ。…

…だけど喜助さんが、「歌ってるよ」って……。

九里子 歌ってる？

恵五郎 「恵ちゃんが一生懸命育ててくれるから、嬉しくてもやしが歌ってるんだよ」って。

九里子 ……そうですか……。

恵五郎 喜助さんがね……教えてくれたんだ。

もやしを育てるその闇が、ゆつくりと二人を包む。

八

泉家の茶の間。

恵五郎が手にした一枚の名刺を覗き込むようにしながら、十子、一彦、九里子、とみが身を乗り出している。

村松は少しうつむきがちに正座している。

恵五郎 (名刺を読む) 「株式会社、松村電器、専務取締役……松村幸雄^{さちお}」。

村松 ……ユキオです。

恵五郎 ああ、ごめん。

一彦 松村電器って、あの松村電器？

とみ 一彦君、知ってるの？

一彦 就職希望者の憧れの的。超のつく一流企業だよ。

十子 冷凍冷蔵庫とか電気洗濯機とか電気炊飯器とか、オーブントースターとかクーラーとかカラーテレビとか……

一彦 いつまで続くんだよ。

十子 電気掃除機とか電気カーペットとか魔法瓶を作っている、あの松村電器？

村松 ……魔法瓶はうちじゃありません。

九里子 ……それで、本当のお名前は「松村」さんなんですか？

村松 そうなんです。

十子 本当につまらない嘘をついていたのね。

村松 逃げたかったんですよ、「松村」の名前から。この十年でみるみる大きくなってしまうた会社の看板を、僕には背負いきれない気がして。

一彦 俺がいつしよに背負ってあげてもいいけど。

とみ 恵五郎さんは間違っていないかったのね。

村松 (頷き) 何度言っても「松村松村」って。しつこく責められている気がしました。いつまでそうやって逃げ回っているんだって。

恵五郎 悪いことしたね。そんなつもりはこれっぽっちもなかったんだけど。

十子 ダメね、お兄ちゃん。悪気がないっていうのはね、一番タチが悪いのよ？

恵五郎 (やや驚いて) おまえに言われるとは思わなかったよ……。

とみ それで……いつお帰りに？

村松 明日……もやしの出荷が終わったら。

恵五郎 幹太が寂しがるよ。将棋の相手がいなくなって。

一彦 俺がいるだろ？

恵五郎 ……気を遣わずに、将棋を指せる相手がいなくなって。

九里子 どうして、帰ろうって思ったんですか？

村松 ……これ以上、両親や会社の人間を困らせるのも大人気ないし、それに……。

十子 ねえ、結婚式には是非出席して！ ご祝儀はね、オーブントースターでいいから！

一彦 (村松に) 悪気はないんだよ。一番タチが悪いんだ。

十子 いいでしょ？ 村松さん！

とみ 「松村さん」でしょう？

十子 いいわよね？ もうどっちだって。

村松 ええ。もう大丈夫です。どっちだって。

とみ (立ちあがり) それじゃあ今夜はごちそうを作らなきゃね。ほら、十

子ちゃん、手伝って！

十子 あたし、佐々木のおかあさんのちらし寿司が食べたい！

とみ あなたが食べたいもの作ってどうするの？

とみと十子は台所へ。

一彦 そうだそうだ！ 忘れないうちに。(と奥へ)

九里子 (腕を組んでうつむいている恵五郎に) 恵五郎さん……？

恵五郎 うん、起きてるよ。

九里子 まあ、珍しい。

村松 本当に申し訳ありません。突然辞めるなんて言い出して。

恵五郎 ……気を遣わせちゃったんじゃないのかな。

村松 え？

恵五郎 住込みの人ひとりぐらいは、まだなんとかなるんだけどね。

村松 ……でしたら是非、散水機を導入してください。

恵五郎 そうだな……。

村松 あまり無理をしないでください。

恵五郎 そっちこそ、慣れない仕事でつらかったらうに。

村松 ……工業機器を扱っているところなら、いくらでも知っています。

恵五郎 いろいろ心配もしてくれて。

村松 多少の融通もききます。

恵五郎 うれしかったよ。

村松 僕に出来ることがあったら。

恵五郎 ありがとう。

九里子 松村さんは、社長さんになるんですか？

村松 将来的には……多分……。

九里子 電化製品はこれからどんどん売れるでしょうし、松村さん、大変です
ね。

村松 ……そんなことを言われると、また肩の荷が重くなります……。

恵五郎 きつと松村さんは、いい経営者になると思うよ。

九里子 あたしもそう思います。

村松 自信ないですよ。あのワンマンな父親と、一緒にやっつけていけるかどうか。

九里子 喧嘩になったら、お化けの話をすればいいんですよ。

村松 絶対イヤです！

恵五郎 なんだ、松村さん、お化けが怖いのか？

村松 いないものなんて怖くありません！ ……父のことだって、怖いとか嫌いってわけじゃないんです。ただ、父の猛烈な仕事ぶりや、熱気にあふれた社内の雰囲気、僕はついていけなかった……。新しく便利なことを理由にしたこの勢いが、もしかしたら、古いものをすべて壊していくんじゃないかって……空恐ろしい気がしてきて……。

恵五郎 松村さんはそんなことしないよ。

村松 どうでしょうか……。

恵五郎 だって、もやしの音が聞こえるんでしょ？

間。

恵五郎 あんな小さな音に耳を傾けられる人は、大事なものを無闇に壊したりなんてしないよ、きつと。

村松 ……。

九里子 みんながよろこぶいいものをたくさん作ってくださいね。

村松 (受け止めて) 頑張ります。……けど……。

九里子 けど？

村松 そんなに朗らかにお願いされたら「頑張ります」としか言えませんけど……難しい注文だな。……喜助さんは、気にも留めてくれませんでしたからね。

九里子 喜助さん？

村松 買物に誘われても、あっさり断ってた。……「売っているものしか買えないから」って。

九里子 あ、覚えてます。「もやし見てる方が楽しい」って。

村松 ……「買うに値するものなんか売っていない」。そう言われたような気がしました。

恵五郎 厳しいお客さんだ。

村松 だとしたら、これから本当にいいものを作っていくしかありません。じゃあいいものとはなんなのか、それを僕らは、いつでも問い続けなければならぬ。

恵五郎 骨が折れるね。

村松 (苦笑まじりに頷いて)世の中の人がみんな十子さんみたいだったら、商売も楽なんですけど。

恵五郎 世の中の人がみんな十子か……。

村松 ……ちよつと、賑やかですかね。

恵五郎 恐ろしく賑やかだろう……。

一彦 (一枚の写真を手に戻ってきて)ほら、村松さん！ ああ、松村さんか。ややっこしいな、もうユキオでいいや！

恵五郎 どうしてそこで呼び捨てになるんだ。

一彦 これ持っていきなよ。先月、九里ちゃんと撮った写真。(九里子に)九里ちゃんには今度、焼き増ししてあげるね。

恵五郎 (写真を見て)ずいぶんしょんぼりした顔で写ってるね。

一彦 俺の腕のせいじゃないからな。ほら、九里ちゃんはいいい顔で撮れてるだろ？

村松 ありがとうございます。いい記念になります。

九里子 この時の松村さん、可愛かったですよ。小さい子どもみたいで。

村松 ……。

九里子 ごめんなさい。失礼なこと言っちゃった……。

村松 いいんです。小さい子どもだったんです。

一彦 そうだ、記念写真撮ろうか？（恵五郎に）三脚どこだっけ？

恵五郎 （寝ている）

一彦 兄ちゃん！ 三脚は？

恵五郎 ……知らないよ。

一彦 ちょっと探してよ。

恵五郎 （立ちあがり）どうせ押入れかどっかだろ。（と奥へ）

一彦 あ！ 幹太がない！

九里子 あたし、公園まで呼びにいきます。（と外へ）

一彦 頼むね！ 姉ちゃん！ おばちゃん！ 写真撮るよ！（と台所へ）

一人残された村松、写真を見つめる。

暗転。

九

蝉の声。

十数年後の夏の泉家。

もやしの小屋は工事用のシートに覆われている。

茶の間の半紙が貼られていた場所には、男物のリクルートスーツが掛かっている。

背中がすっかり曲がって小さくなってしまったとみが繕い物をして
いる。

そこへ電話が鳴り、奥の部屋から恵五郎が入ってくる。

恵五郎 （電話に出て）はい、泉商店です。ああ、こんにちは。……ええ、

そうなんです。長い間、ありがとうございます。引継ぎの業者は先日、ご主人の方に……。はい。

台所からエプロン姿の九里子が入ってくる。

恵五郎 わざわざご丁寧にどうも。はい、お店のみなさんにもどうぞよろしく。失礼します。(切る)

九里子 (とみに) おかあさん、もうじきお昼ごはんですよ。

とみ ありがとうございますね、静子。

恵五郎 九里子ですよ、お義母さん。

九里子 いいですよ。静子でも九里子でも、お好きな名前で呼んでいただければ。

上等なスーツに身を包んだ松村が庭に姿を現す。

松村 こんにちは。

恵五郎 やあ、ひさしぶり。

松村 近くまで来たものですから。とみさん、ご無沙汰しています。

とみ まあまあ、ようこそ遠いところを。

九里子 もうすぐ一彦さんもみえますよ？ よろしければ、お昼ごいっしょにいかがですか？

松村 すぐ戻らなければいけないですよ。

九里子 お忙しいんでしょう？ 社長さんともなれると。

松村 まだ副社長ですから。

ワイシャツにネクタイ姿の一彦が玄関から現れる。

一彦 なによ、外のあのでっかい車！（松村に気づき）ユキオさんか。

松村 どうですか？ お仕事の方は。

一彦 相変わらず本音と建前を使い分けろって怒られどおしだよ。もうすぐしじゅう四十になるってのにさ。

十子 (玄関から現れ) なあに？ あの立派な車！ あら、村松さん！ ちようどよかった。うち、電子レンジ買おうと思ってるんだけど、今、買い時？ もっといいのが安く出るかしら？

松村 さあ、その辺は僕にはちよつと。

一彦 「松村さん」だよ。世界の松村電器だぞ？

十子 (一彦に) あなた、外回りの度に実家でごはん食べるのやめなさい。

お家で多恵子さん、泣いてるわよ？

一彦 笑ってるよ、家の奥方様は。テレビ見ながらゲラゲラね。

十子 九里ちゃんだって迷惑でしょ？

九里子 たいしたものありませんから。

恵五郎 (十子に) おまえはなにしに来たんだ？

十子 佐々木のおかあさん、こんにちは。

とみ まあまあ、ようこそ遠いところを。

十子 あたしよ、おかあさん。

とみ あら、十子ちゃん。お嬢ちゃんの浴衣、出来ていますよ。

十子 ありがとうございます。下の子の方も？

一彦 どっちが迷惑だよ。

松村 (シートに囲まれた小屋を見て) お店、とうとう畳まれるんですね。

恵五郎 あの小屋ももう寿命だね。湿気で柱がダメになってた。

松村 残念ですね。

九里子 近頃、よそでもやしを買ったりしますけど、やっぱりね、あんなに
おいしくないですよ。

恵五郎 散水機とか梱包の機材とか、松村さんにはいろいろお世話になった
のに申し訳ないね。

松村 いいえ、たいしたお力にもなれなくて。

恵五郎 知り合いのもやし屋を手伝うことにしたよ。水撒きも温度管理も機械がやってくれる、大きいところだけだね。

一彦 兄ちゃんは結局、一生もやし屋か。

十子 ねえ、幹太は？ 就職、決まったの？

九里子 まだなんですよ。やっぱりミュージシャンになりたいなんて言い出して。

一彦 わかるなあ。学生最後の夏休みを、こんなスーツ着て会社なんか回ってられるかっていうんだよ。

恵五郎 余計なこと吹きこむなよ？

松村 よかったら、うちも受けるように言ってくださいよ。来年は新卒の枠を大きく増やしていますから。

十子 あら！ 社長のお墨付き？ いいじゃない！

松村 まだ副社長ですけど。

小屋の方から、取り壊しの始まる音。

とみ以外の全員が、一瞬、その音に意識を向ける。

恵五郎 ……始まったな。

松村 (腕時計を見て) もう時間だ。それじゃあ、僕はこれで。

九里子 いつでもいらしてくださいね。

恵五郎 待ってるよ。

十子 今度うちにも遊びに来て？ 冷蔵庫の調子がおかしいのよ。

一彦 そんなこと副社長に頼むなよ。

松村 (とみに聞こえるように) とみさん、失礼します。

とみ ……あら。村松さん？

松村 そうですね。

とみ まあまあ、ずいぶんご立派になられて。

松村 また来ますからね。

とみ （独り言のように）……みーんな変わってしまったわねえ……。

松村 それではみなさん……、

とみ （やはり独り言のように）変わらないでも、よかったのにねえ……。

間。小屋のシーートの向こうからは、立て壊しの音。

一彦 ……そうかもね。

玄関の扉が開く音に続いて元気な青年の声。

幹太 （声だけ）ねー！ 外のあのでっかい車なにー？

恵五郎 こら幹太！ 帰ってきたら「ただいま」だろ。

十子 （松村に）もうね、図体ばかり大きくなっちゃって。

松村 じゃあ顔だけ見ていこうかな。

一彦 （玄関の方に向かって）オイ、なんだよおまえ、ミュージシャンになりたいたって？

九里子 （とみに）さあおかあさん。お昼ごはんにしましょうね。

工事の続く音。セミの声。

和やかな表情の人々に、ゆっくりと幕が降りてくる。

終